六月二十三日

進むありおくるゝもあり時はかる
うつはの針もまちくにして

明治三十八年御製――「時計」

「時を計る時計でさへも、進むのもあるし、又遅れるのもあつてまちくである。(況してや人間のことに遅速あるのも、亦止むを得ない)」との御意と恐察し奉る。人事は如何に正確にしようとも、器械的にすることは困難である。況んや人の心をや。これを統一するといふことは到底不可能なことである。又統一しないところに社會の進歩もあるのである。自己と同じ心になれといふことは少しく亂暴な考へ方である。親が子供に對する時、教師が兒童に對する時など、最もこの心が必要である。親や教師と同じ心になつたならば、親や教師より優れた子供がゐなくなることになるのである。

六月二十四日

くもりなき朝日のはたにあまてらす
神のみいつをあふげ國民

明治三十八年御製――「旗」

「朝日のはた」とは、日本の國旗は旭日の赫々たるを表徵するものである。故にくもりなき朝日のはたと仰せ給ふ。「あまてらす神」とは天照大神を申す。「みいつ」は御稜威のこと。赫々として輝きわたる朝日の旗の象徵たる天照大神の御稜威を仰ぎ見よ國民」と天照大神の御稜威をたゝへさせ給ふ御歌と拜する。天照大神こそは我が建國精神を定め給ふ大神にまします。今は伊勢の國五十鈴川の上流に鎮座まします。近來遠隔地の小學校生徒ですら必ず伊勢參宮を實行してゐるが、甚だ喜ばしい傾向であると思ふ。國民擧つてせめて一年一回は伊勢參宮をなして天照大神の御稜威をたたへたいと思ふ。

六月二十五日

冬の夜の寒さをしのぐ酒だにも
えがたかるらむつはものゝとも

明治三十八年御製――「酒」

「つはものゝとも」は軍人のともがら。「滿洲の曠野にたゝかふ軍人たちは、冬の夜の寒さを凌ぐ酒さへも得がたいことであらう」と冬夜戰場の艱苦を思召された御歌と拜し奉る。この御製を拜誦して、明治大帝の將士の艱苦を思召させ給ふ大御心に感泣すると共に、酒といふことについて吾等國民は熟慮せねばならない。酒によつて財産を蕩盡したり、甚しきはその身をさへ滅ぼす者も決して少なくない。最近禁酒運動さへ興つてゐる位であり、殊に酒は精神を亂すものであるから、禁酒こそ望ましいことである。日本國民の酒代を以てすれば、國防費などは易々たるものである。

六月二十六日

うるはしくかきもかゝずも文字はたゞ
讀みやすくこそあらまほしけれ

明治三十八年御製――「書」

「文字はうるはしく書くにこしたことはないが、然し「うるはしい拙いといふよりも、文字は第一に讀み易く書くやうにしたいものである」との御意と拜する。社會が複雜となるに從つて次第々々に忙しくなつて手紙や書類を一々判讀してゐる暇はないのであるから、所謂亂筆の書類や手紙を貰つた人こそ大迷惑である。時としては互の取引上に大きな間違が生じないとも限らない。或は亂筆のために人の感情を害して、長年の交際に罅がいることさへある。故に文字は上手に勝ることはないが、上手に書くといふよりは先づ第一に他人が見てすぐ判るやうに書くことを心におかねばならない。

六月二十七日

うとましと思ふ葎はひろごりて
植ゑてし草の根はたえにけり

明治三十八年御製——「草」

「うとまし」はきらはしい、いやなどの義。「葎」はいぶせく茂る蔓草のこと。「ひろごりて」ははびこつての意。「うとましいと思ふ葎などが茂りはびこつて、わざ〳〵植ゑた庭草が枯れてしまつた」とは文字上に表はれた御意で、「世上の風儀などが亂れて、正しい道はやゝもすればおされ勝ちである」ことを諷せさせ給うた御歌と恐察し奉る。げに世の中を通觀するに、流行せぬでもよいものが熾んに流行して人心を風靡し、世道人心を改めるやうなことは却つて衰へてゐることは今もなほ昔と變りはない。輕佻浮薄の風潮などは、一日も早くその影をひそめるやうにしたいものである。

六月二十八日

あるゝかと見ればなぎゆく海原の
なみこそ人の世に似たりけれ

明治三十八年御製——「海」

「怒濤荒れ狂ふかと見れば、忽ち凪いで鏡の如くなる。この起伏常なき波こそ、人生に髣髴たるものである」との御意と拜し奉る。俗諺に七轉八起といふ。起伏常なきは人生の行路である。昨日の富豪は今日の乞食となり。今日の大官は明日養老院の一室に呻吟することも決して珍らしい現象ではない。變轉極まりなくはかり知られざるは人生である。世界の强國を誇つた獨逸のカイゼルも、今はオランダの一寒村に辛うじて病體を養ふ身ではないか。世界併呑を企圖したナポレオンもモスコーの一夜を明かして、セントヘレナの孤島に淋しく逝いたではないか。

六月二十九日

しるべする人をたよりにわけいらば
いかなる道かふみ迷ふべき

明治三十八年御製――「道」

「しるべする人」は案内して導く人をいふ。「案内する人をたよりとして、わけいるならば、どんな道でも踏み迷ふといふやうなことはない」とは文字上の御意で、「如何なる事柄でも指導する人につき従つて研究したならば、決して身を誤るやうなことはないであらう」との御意も含まれてゐる御歌と恐察し奉る。人に師なきは恰も船に船頭がないやうなもので、何處に流れつくか。或は途中に於て岩石に打ちつけられて破船のうきめを見るかも知れない。極めて危險この上もない。人に師があつたならば、船に船頭あるやうに、途中で岩石に衝突することもなければ、漂流することもなく、目的地に無事達することが出來る。

六月三十日

山よりもさびしきものは限なき
荒野の原をゆく日なりけり

明治三十八年御製――「原」

「山を行く時よりも、限りない荒野の原を行く時が最もさびしいものである」との御述懐と拝する。限りなき荒野の一句を拝誦して、南米の荒野を連想し、北満の曠野を思ひ起す。何れも無限の寶庫である。人口過剰になやむ日本國民は、須らく海外に發展して、この無限の寶庫の扉を開き、日本男兒の勤勉力行の實を擧げると共に、國威を海外に宣揚せしむる捷徑と思惟するのである。狹い内地にあつて失業苦に喘いでゐるより、雄志を海外に伸ばして、一大事業を起すも亦愉快なる哉である。前途多幸なる青年は、この一島國に蹐蹐して居るべきではない。

七月一日

踏み分くるひとなかりせば末つひに
わかずやならむちよのふる道

明治三十八年御製——「道」

「わかずやならむ」は分け難くなるであらうの意。「ちよのふる道」とは古から習はし來たつた道の義で、上代の學藝をいふ。在原行平の歌の「嵯峨の山みゆき絶えにし芹川の千代の古道あとはありけり」から出て、その後屢々歌に用ゐられた。「上代の尊い學藝もこれを指導する人がなかつたならば、遂には不明になつてしまふであらう。今のうちに繼續修練しておくべきである」との御諭しと拜する。凡て古いものでも、價値あるかないかを見分けて、價値あるものは、古いと云つて捨てずに、これを保存しておくべきである。たゞ單に古いからといつて捨てゝ終ふことは戒むべきことである。

七月二日

なか〳〵に色こそよけれつくろはぬ
しづが垣根の朝顔のはな

明治二十九年御製——「田家朝顔」

「なか〳〵に」は却つての意。「つくろはぬ」はつくり飾らぬ。「つくり飾つて培養した朝顔よりも、農家の垣根に咲いた自然のまゝの朝顔が却つて美しいものである」との御意と拜する。都會美といふものは兎角餘りに人工的であつて、優雅の趣きに乏しい。恰も厚化粧の婦人のやうな感じのするものである。それに反して地方人は、ぎごちなくはあるが、自然そのまゝの純朴さがあつて、何處となく優雅な趣きがある。そこに都會美と自然美との相異があるのである。人情や人柄に於ても亦さうした趣きがあり、都會の人は輕薄で個人的なるに反して、地方は純朴で人情がこまやかである。

七月三日

むら雲のたえま〳〵に夕月夜
さすかとみればかつかくれつゝ

明治十三年御製——「雲間月」

「むら雲」は群つた雲。「夕月夜」は夕月をいふ。「かつ」は一つの事があつて、又他の事を兼ねるにいふ。「夕月が村雲の絶間々々から光がさすかと見れば、又忽ちにしてかくれる」との御意と拜する。人の一生も亦叢雲にかゝる月影のやうなものである。稍々成功に近づいたと思へば失敗し、再び挽回したところでまたまた蹉跌を生じたりして、なか〳〵自分の思ふやうにはいかぬのが世の中である。所謂トン〳〵拍子といふやうなことは、餘程幸運の籤を當てた人でなければ摑めない。さりとて悲觀する必要はない。努力と誠意に對しては、神も照覽して、必ずや成功の山へ登せて呉れるものである。

七月四日

うゑおきし庭のくれ竹よゝを經て
かはらぬ色のたのもしきかな

明治十四年御製——「竹有佳色」

「くれ竹」は支那の吳の國から渡つたと言ひ傳へられる淡竹の類である。「よゝ」は代々の義であるが、竹の節をよといふにかけて緣語となる。「植ゑ」ておいた庭の竹が幾年經てもその色を變へぬのがたのもしいとの御意と拜する。竹と松とは四季その色を變へぬ故に、よく人の節操に喩へられるが、人の節操もこの竹や松のやうに變らぬやうにしたいものである。近代のやうに物質が物を云ふ時代になると、節操といふやうなものは、甚だ怪しいものになつて來る。卽ち黃金にその節操を變へるやうな人とならぬやうに心がけなければならぬ。節操のない人ほど危險な人物はない。

七月五日

村雲のおほふと見しは夕立の
みねより嶺にかゝるなりけり

明治十五年御製——「嶺夕立」

「村雲」は叢雲で、一群の雲。「村雲が嶺をおほふのであると見えたのは、夕立が疾く移つて、嶺から嶺にかゝるのであつた」との御意と拝する。夕立の雲の疾く移り行くのは、恰も悪風潮の流行し易きに似てゐる。善には化し難いが、悪に染みるが極めて早く、知らず識らずのうちに悪道に入つてゐることがある。常に戒慎を怠つてはならぬのは悪の誘惑であり、悪の蔓衍である。それには善悪の觀念といふことを確立しておかなければならない。如何なることが善事であるか、また如何なることが悪事であるかといふことの區別をはつきり立てゝおかぬと、人は知らずに悪の中に落ちることがある。

七月六日

久方の空ゆく月も海原の
波間にかげはうきつしづみつ

明治十五年御製——「波間月」

「久かたの」は空の枕詞。「空をうつり行く月も、その影は海の波間に浮きつ沈みつしてゐる」と波に映る月影を御詠じ遊ばされた御歌である。この御製を拝して吾々は水に映るその影を考へさせられるのである。水に映るその影を捉へようとして、猿が水に溺れたといふ話があるが、人間もこの猿の愚を眞似ないやうにしなければならない。水に映つた月影は月の影で月ではない。即ち現象なのであつて、月の本體は矢張り天にあるのである。兎角人間も亦猿のやうに現象に迷うて、これを掴まむとするが、物事には必ずその本體と現象があるのであるから、凡てその本體を把握するやうにしなければならぬ。

七月七日

昔よりながれたえせぬ五十鈴川
なほ萬代もすまむとぞ思ふ

明治十五年御製——「河水久澄」

「五十鈴川」は伊勢大神宮の境内を流れる川であるが、皇統にたとへて用ゐさせ給ふ。「二千五百有餘年の昔から水の涸れたことのない五十鈴川である。今後なほ千萬年も變ることなくこの清流がつゞくことであらう。卽ち、二千五百有餘年前の神武天皇の昔から、連綿たる皇統は、これから千萬年も永久不變であることであらう」との御意と拜し奉る。凡て人は五十鈴川の流れのやうに、清い心を常に持つてゐなければならぬ。國民の清いこの心を持つて義勇奉公の精神を發揮するところに、大日本帝國の國威も清く高く、世界に輝くことになるのである。人は常に清く朗かにあらねばならぬ。

七月八日

しづのをも門田のくろをゆづる世に
なにかしましく蛙なくらむ

明治二十九年御製——「田家蛙」

「しづのを」は農夫のこと。「くろをゆづる」は史記、五帝本記虞舜の條に「舜歷山に耕す。歷山の人皆畔を讓る」とある故事で、世の中が泰平に治まつて、耕す者もあぜ道をゆづりあふ義である。「なに」は何故にの意。「かしましく」はやかましく。「世の中が無事泰平に治まつてゐるのに、何故に蛙がやかましく鳴くことであらう」との御意と拜する。平靜の家庭に波風を立てゝ騒ぐのは蛙ばかりではあるまい。吾々も家庭にあつて、蛙のやうな言行はないであらうか。安らかに憩ふところの家庭はどこまでも家族の慰安所たらしめるやうに、家庭の人々が互に注意して波風を立たせぬやうにしなければならぬ。

七月九日

夏草のしげきを見ればあらたよに
いまだひらけぬ道もありけり

明治二十九年御製——「行路夏草」

「あらたよ」は新しい世の中。「夏草が茫々と茂つてゐるところを見ると、この文化の世になつても、まだ人の踏み開かぬ地方もあるのであらう」との御意と拜する。昭和の聖代になつては、鐵道も四通八達し、急激なる文化の進歩によつて、長足の開化を見たのであるが、未だ文化の絶頂にあるとは云へぬ。國民の一致協力によつて、尙一層の向上發達を期さなければならねことは勿論であるが、醫學・宗教・政治・工業等社會の凡ての方面に於て、まだ〳〵改良進歩の餘地はあるのである。吾々は精勵研鑽を積んで、世の文化に寄與すると共に、社會に貢獻するところあらねばならぬ。

七月十日

としどしに光そひてもみゆるかな
やまとしまねの秋のよの月

明治二十九年御製——「月」

「としどしに」は年毎に、毎年。「やまとしまね」は日本國の稱である。もと大和に帝都があつたところから、ひいて日本の總稱となつた。「我が大日本帝國の秋の世の月が、毎年その光を增して見えることである」と我が國威の宣揚を御賞で遊ばされての御歌と拜し奉る。明治・大正・昭和にわたる僅か六十有餘年間に於ける日本の國威の宣揚と文化の發達といふものは、實に驚嘆の外はない。諸外國が日本のこの異常なる膨脹に恐れをなしてゐるのも無理からぬことである。然し我等國民はこれに滿足することなく、皇祖皇宗の遺訓を遵守して、更に立派なる大日本帝國を建設しなければならない。

七月十一日

なかばにてやすらふことのなくもがな
學の道のわけがたしとて

明治四十年御製——「道」

「やすらふ」は躊躇逡巡すること。「なくもがな」はないやうにありたいと希望する詞。「學問の道はむつかしいと云つて、中途で躊躇逡巡せぬやうにせよ」と學問を研究する人々を誡め給ふ御製である。世の中には學問の道に入れぬ人さへもあるのである。自分は學問を研究する道に入れたといふことは、親達に對しても先づ感謝しなければならないのである。然るに、中途に於て學業の困難なるに辟易して中止するやうな弱者では、他の事をやつても矢張りその通りであつて、何事も成就することはむつかしい。一たび學問に志したならば、世の中のことなどは意に介せず專念すべきである。

七月十二日

からやまと色をまじへて咲きにけり
ひろきそのふの撫子の花

明治三十二年御製——「庭瞿麥」

「から」は唐で、昔我が國で支那を稱した語であるが、廣く外國の意に用ゐる。「やまと」は日本の異稱。「廣い庭に日本種と西洋種の撫子が入りまじつて美しく咲きほこつてゐる」との御意である。近來の日本文化は恰もこの庭のやうである。本來の日本文化と西洋文化とが合して、今日の日本文化が築き上げられたのである。從つて多少は西洋文化の短所も同時に入つてゐることは明かであるから、西洋文化の短所はこれを捨てゝ、我が國本來の文化の長所はどこまでもこれを發達せしめるやうに努むるところに、皇國日本の本來の面目が發揮されるのである。

七月十三日

たかどのゝ内もあつさにたへぬ日に
しづがふせやを思ひこそやれ

明治三十五年御製——「をりにふれて」

「たかどの」は高樓。「ふせや」は屋根が低くて地に伏してゐるやうな矮陋な家の義。「高樓のうちにあつてさへ堪へかねるやうなこの暑さに、矮陋な家に住む下級な者はさぞかし苦しいことであらう」と、下層民の生活を思召されての御歌と拜する。實に社會の生活は種々さまゞであつて、上を見れば際限なく、下を見ればまた限りのない氣の毒な階級もあるのである。自分の境遇の不幸を考へる前に、先づ陋屋に雨露を凌いでゐる人々のことを思へば、まだ〳〵幸福であるといふことを考へなければならない。人は僅かの心のおきどころによつて、不平のない感謝の生活が出來るのである。

七月十四日

梓弓やしまのほかも波風の
しづかなる世をわがいのるかな

明治三十五年御製——「をりにふれて」

「梓弓」は「や」にかゝる枕詞。「やしま」は八洲で、日本の一名である。「我が日本國内ばかりでなく、諸外國も亦平和であるやうにと祈ることである」と、世界の平和を祈らせ給ふ御歌である。諸外國では日本を指して好戰國であるかのやうに云つてゐるが、この明治大帝の御製を拜しても、日本は好戰國でないことが判然とするであらう。過ぐる日清日露の戰役も、兩國の傲慢無禮なる態度に、忍ぶ能はずして、東洋の平和のために、世界人類のために、止むを得ず正義の矛をとつて起つたのである。日本は自ら好んで始めた戰爭といふものは、未だ嘗て一度もないのである。

七月十五日

草まくら旅にいでゝは思ふかな
民のなりはひさまたげむかと

明治三十六年御製――「旅中情」

「草枕」は旅の枕詞。「なりはひ」は生業。「行幸が國民の生業を妨げることもないかと、旅に出でゝは思ふ」と、國民の上を思召させ給ふ大御心の御發露と拜し奉る。かくまでに國民の上に大御心を注がせ給ふ廣大無邊なる御仁德のほどは、かしこしともかしこき極みである。然るに下國民のうちに、他人の生活などを少しも顧みることなく、自己本位の振舞がある人を屢〻見受けることがある。或は乘物の中で、集會の場所などで、他人の迷惑などは少しもお構ひなく、苦々しい行動をして何等恥としない不心得者があるのは甚だ遺憾である。社會生活といふことを忘れぬやうにしたいものである。

七月十六日

盃をけふもさづけつ位山
はじめてのぼる人をいはひて

明治三十六年御製――「盃」

「位山」は飛驒にある地名で、古くから位階のことに喩へられた。有爵者若しくはその嗣子が成年に達した時、初めて五位に叙せられて、天盃を賜はることを詠ませ給へる御製である。孔子は人爵よりも天爵を尚ぶべきことを敎へてゐる。人爵とは人から與へられるところのものであつて、天爵とは己の人格の完成によつて自然に生ずるところのものをいふ。人爵を得ることよりも、天爵を得ることが困難である。社會の凡ての人が尊敬して奉るのが天爵であるから、人爵よりも尊く、又これを得ることが困難であることは當然である。然し天爵は一度得れば褫奪されることはない。

七月十七日

ひとり身をかへりみるかなまつりごと
たすくる人はあまたあれども

明治三十六年御製――「述懐」

輔翼の臣は數多あるけれども、なほ御身を省察せさせ給ふことを御詠じ遊ばされた御製である。社會の凡ての人々がこの自己省察といふことをやつたならば、紛爭ごとも減少するであらうし、共同一致なども實現されて、非常に明るい世の中となることであらう。然し凡人は小我に囚はれ易く、我執の迷夢から醒め難いものである。小我に囚はれ、我執に惱まされてゐる間は、自己省察は行はれない。人は毎朝起きて皇室と先祖の靈と神とを禮拜する時に、靜かに自己省察をするやうに努めたならば、次第に小我を離れて大我につき、我執の迷夢から醒めることが出來るであらう。

七月十八日

民のため心のやすむ時ぞなき
身は九重の内にありても

明治三十六年御製――「をりにふれて」

「宮中にゐましても、常に國民のために大御心を勞させ給ひ、少しも御休心遊ばされる時がない」との御意と拜する。大日本の國民はこの　明治大帝の大御心を安んじ奉るために、自分の職業に精勵することである。かれこれと理窟を云つてゐる場合ではない。近來の青年は手足を動かすことより、先に口を動かして理窟をこねる傾向があるが、理窟を云つてゐる時間を、働くことに利用したならば、上は　明治大帝の大御心に副ひ奉り、國を富ませ、自分も亦愉快な氣分を味ひながら、經濟的にも惠まれるのである。理論を後にして先づ實行を先にすることである。

七月十九日

天てらす神のみいつを仰ぐかな
ひらけゆく世にあふにつけても

明治三十六年御製――「をりにふれて」

「天てらす神」は天照大神を申す。「みいつ」は御稜威のこと。「わが國は天照大神の詔命によつて、代々の天皇相繼いで、天つ日嗣しろしめすことであるから、いよ〳〵開け行くにつけても、その御稜威を仰がれ給ふ」との御意である。げに我が日本の建國の大精神こそは天照大神の定め給ふところである。吾等國民が毎日安泰に生活し得られるのも、これを溯れば偏に天照大神の御稜威によるところである。といふことを、はつきりと認識しなければならぬ。神代紀を以て單なる神話として輕んずることは大なる誤謬である。吾等の道德はこの神代に於て確立されたのである。

七月二十日

事繁き世にも似たるか夏草は
拂ふあとよりおひ茂りつゝ

明治三十七年御製――「夏草」

「一事をはればまた一事が起つて、なか〳〵繁忙なこの世の中が、恰も、苅り拂ふあとから〳〵生え茂る夏草に似てゐる」との御述懷と拝し奉る。御政務に御精勵遊ばされ給ふ　明治大帝の大御心のほどが伺ひ奉られて、いとも畏き限りである。近來都會の人々はハイキングや映畫に憂き身を窶したり、避暑や避寒に虚榮心を滿足させたりしてゐるが、明治大帝の御精勵を拝したならば恐懼の外はあるまい。必ずしも運動や養生を惡いといふのではないが、その程度を超えて、無駄な費用をかけたり、つまらぬ虚榮心を滿足せしめるやうなことは、斷じて改むべきである。

七月二十一日

年々におもひやれども山水を
汲みて遊ばむ夏なかりけり

明治三十七年御製――「夏山水」

萬機の御政を一日も忽せにせさせ給はず、炎暑の候に、山川に暑さを避け給はなかつた御實況を御詠じ遊ばされた、いとも恐れ多い御製である。明治大帝御在世中、市内の行幸を除きては、明治元年より崩御の明治四十五年までに九十八回の多きにわたらせ給ふのであるが、そのうち避暑の行幸とも申し奉るべきは、明治六年八月箱根宮の下に行幸遊ばされた唯一回に過ぎないのである。何と恐れ多いことではないか。況してや我々下々の國民が、苦しい財布の底をはたいて、人並に避暑の虚榮心を充たすなどは、誤れるも亦甚しいことである。暑い寒いなどゝいふことは心の持ち方にあるのである。

七月二十二日

久方のあまつ空にも浮雲の
まよはぬ日こそすくなかりけれ

明治三十七年御製――「天」

「久方の」は枕詞。「空にも一點の浮雲のない日とては少ない。即ち世事に何の障りもない日とては少ないものである」との御意と拜する。人の一生を熟々靜視するに、本統に安らかな一日といふ日は極めて少ないことを知るであらう。それで佛教では現世を苦の世界としてゐるが、人間の心には何かしら苦みや障りがあるものである。殊に世の中が複雜になるに從つて、ますゝそれが多くなつて行くことであらう。これ等次から次へと生じて來る問題は、己の身にふりかゝる事柄であるから、自分で誠の心を以て、正しく處理して行くことを考へなければならない。

七月二十三日

ひらくれば開くるまゝに思ふかな
あらぬ道にや人のいらむと

明治三十七年御製――「道」

「世の文化が開けぬ時は、一日も早く文明開化を希望してゐたが、さて世の中がいよ〳〵發達進歩を遂げて見ると、正しくない道に人が踏み迷ひはせぬか」と思召されて、大御心のやすむ時なきことを御詠じ遊ばされた御歌と拜し奉る。犯罪と文明の程度とが正比例してその數を增加するものである事實に見ても、これからも次第に犯罪の數が增加するものと考へなければならない。あらぬ道に踏み迷ふ人がどうして斯くまで多くなるのであらうか。吾々は誠の心を以て之等の憐むべき人々の良心を醒まして、一日も早く迷ひの道から救ひあげてやらなければならない。

七月二十四日

今もなほふみわけがたき深山路を
開きし人の昔をぞ思ふ

明治三十七年御製――「山路」

「開けて行く今日でも猶その險しさに行きなやむやうな山道を、初めて開いて、人々が通ふことが出來るやうにした古人の功勞を思ふ」との御意と拜し奉る。吾々はこの昭和の文明を開拓した明治・大正なほそれ以前の人々に感謝し、更に電氣といふ便利なものを發明したフランクリンや汽車を發明したスチブンソン、ラヂオを發明したエヂソン、天然痘の災厄から救つて呉れたジエンナー、進化論の開祖たるダーウキン等々々の人々にも大いに感謝の意を表さなければならぬ。これ等の人々の努力によつて文明の利器を利用し、その惠澤を受けてゐるのである。

七月二十五日

岩がねにせかれざりせば瀧つ瀬の
水のひゞきも世にはきこえじ

明治三十七年御製——「瀧」

「岩にせかれなかつたならば、瀧の瀬に流れる水の音も聞えぬであらう。卽ち岩にせかれて水ははじめて激するのである」と人事に艱難多いために、却つて名をなすものであることを諭さしめ給うた御製である。艱難汝を玉にすといふ格言の如く、人は艱難に遭つて奮起するために、却つて世の中に名を成す人となるのである。艱難にあはぬ人は眞の社會を解することが出來ず、又本心からなか〳〵奮起することが出來ない。世の多くの成功者は、身を微賤より起して、幾多の艱難を經てゐることは歷史が明かに物語つてゐるところである。一農夫の子秀吉は草履取りの艱難を嘗めて、遂に天下を取つたではないか。

七月二十六日

をさなくて住みし昔のありさまを
折にふれては思ひいでつゝ

明治三十七年御製——「思故郷」

折にふれ、事について御幼時を偲ばせ給うた御製である。人間は屢々幼ない時を思ひ出すといふことは非常によい事である。幼時に苦勞をした人は、當時の艱難を思ひ出して自ら戒慎し、怠惰を警めながら奮鬪努力するであらうし、又、幼時幸福な生活であつた人は、自己の努力の足らざるために、かく勞苦に居るのであるといふことを悟つて、更に奮起するに至るであらう。更に又幼時を追憶する時に、睦しかりし兄弟姉妹の身の上を思ひ、海よりも深く、山よりも高き親の養育の恩を感じて、己の心を緊張せしめて、新しき自己をはつきりと知ることになるであらう。

七月二十七日

なか〳〵にみやびすくなしあまりにも
作りすぎたる庭のけしきは

明治三十七年御製――「庭」

「なか〳〵に」は却つての意。「みやびすくなし」は雅致に乏しいこと。「餘りにも人工を加へ過ぎた庭園の景色か、却つて雅致に乏しいものである」と、自然を喜ばせ給うた御製である。自然のまゝ、心のまゝは何とゆかしくも貴いことであらう。心にもない世辭をふりまいて、その場を飾ることは、表面上品のやうに見えて、却つて卑しいものである。都會の交際に於て屢〻かうした情景を見るのであるが、誠なき世辭は、人の交際に何の力にもならない。寧ろ心のまゝで、外見を飾らぬ質朴な人の言葉こそ、下品に見えるやうであるが、人の本心に觸れてゆかしいものである。

七月二十八日

くむ人もたえし野中のふるゐには
かへりて清き水やわくらむ

明治三十七年御製――「古井」

「ふるゐ」は古い井戸。「かへりて」は却つての義。「世の人からは忘られて、誰一人として水を汲むこともない野中の古井戸には、却つて清い水が湧くことであらう」と、古きを訪ねて、捨て給はぬ大御心を御詠じ遊ばされた御製と拜し奉る。日用品にしても「凡て古いものが善い。新しいものは體裁はよいが、質が惡い」とはよく耳にすることである。この言葉は、現代の世相を雄辯に物語るものではないか。世の中から變人として顧みられない人の中に、顯官もなか〳〵及ばぬ達見を持つてゐる人物がある。名利を離れた達識の人こそ、却つてゆかしく尊敬すべきではなからうか。

七月二十九日

いぶせしと思ふなかにもえらびなば
くすりとならむ草もあるべし

明治三十七年御製――「草」

「いぶせし」とはむさぐるしく煩はしいといふほどの義。「野草がむさぐるしく煩はしいまでに茂つてゐる中にも、よく〳〵擇び出したならば、藥草もあることであらう」と、物事は凡てなほざりにすべからざることを諭させ給ふ御歌と拜する。世の中に全く無益なものとては極めて少ないものであつて、神は何等かの役に立つべくこの世に存在せしめてゐるのである。バタ屋が拾ふ物を見て、世人は這麼物は何の役に立つかといぶかしく思ふであらうが、あれが立派な役に立つために、彼等の仕事となつてゐるのである。凡て些細な物でも、決して粗末に取扱ふものではない。

七月三十日

わたなかに潜めるたつも大空の
雲をおこさむ時はあるものを

明治三十七年御製――「龍」

「わたなか」は海の中の義。「海洋の中に潜んでゐる龍でも、空に雲を起して大雨を降らせる時はあるのであるが（時節到來せぬために、空しく龍となつてゐるのである）」との御意と拜し奉る。孔子も時に會はずして、陳・蔡の間に彷徨してゐた時がある。南隴に隱れたる諸葛孔明も、一度起つて司馬懿の大軍を破つたのである。如何なる英雄豪傑や聖人君子も、その時に會はなければ己の智力・才能を表はすことが出來ない。故に諸君も假令不遇の身にあるとも、決して落膽する必要はない。軈て花咲く春もめぐり來るのである。不遇にあつては自暴自棄こそ慎むべきである。

七月三十一日

あらはさむときはきにけりますらをが
とぎし劍の清き光を

明治三十七年御製——「劍」

「清き光」は正義の爲めに戰ふ皇軍の精神を示させ給ふ。「軍人が日頃研ぎすました劍の清い光を表はす時は來た」との御意である。正義のために止むに止まれずして起つ。これが日本魂の發露である。日本武士道の眞髓である。日本男兒は決して輕擧盲動はしないが、一度日本魂の發露あらば、斷じてこれを行ひ、水火の中をも敢て辭することはない。身を鴻毛の輕きにおき、國のため君のために一身を捧げる。この日本魂の前には幾千萬の敵も忽ち退散するであらう。世界の諸國が我が國を恐れるのはここである。人一たび起たば、死すとも止まざる覺悟こそ肝要である。

八月一日

榊葉にかくる鏡をかゞみにて
人もこゝろをみがけとぞ思ふ

明治三十七年御製——「鏡」

「榊葉」は神前に捧げた榊をいふ。「かゞみ」とあるより、第四句で「みがけ」と仰せ給ふ。「神前の榊にかけた鏡の曇りのないのを、人々の心の鏡にせよ」との御意である。世の人の心を明鏡に映して見たならば、少しの曇りのない人は果して幾人あるであらうか？多少の差こそあれ、曇のない人は極めて尠ないことであらう。神に對して耻かしい限りではないか。萬物の靈長たる面目にかゝはるところはないか。言葉にこそ明鏡止水などゝ云はれてゐるが、云ふ本人の心は果して誠の明鏡止水であらうか。徒らに一時を糊塗する賢人氣取りの言葉でなければ幸である。

八月二日

よの中はたかきいやしきほどくに
身を盡すこそつとめなりけれ

明治三十七年御製——「述懷」

「たかきいやしき」は身分の高下をいふ。「ほどくに」はその分際相應にの意。「世の中は身分や職業に高下の差別はあるけれども、その分際相應に、職分に身心を盡すのが人間のつとめである」とのお諭しと拜する。一勞働者であるから國家のために盡せないといふことはない。又、政治家だけが獨り國家の爲めに盡してゐるのでもない。己の職業に忠實であつて、人たるの道を踏んで生活してゐることは、とりもなほさず國家のために盡してゐることになるのである。必ずしも戰場に出でなければ國家に盡せないのではないのである。

八月三日

照るにつけくもるにつけて思ふかな
わが民草のうへはいかにと

明治三十七年御製——「述懷」

「絶えず國民の上に大御心を注がせ給ふ忝き御製である。雄略天皇は「義は乃ち君臣、情は父子を兼ぬ」と仰せ給ひ、聖武天皇の詔にも「朕父母と爲りて何ぞ憐愍せざらむ」とあり。孝謙天皇の詔には「區宇に母臨し、黎元を子育す」とあり。歴代の天皇の御仁德はこの外にも限りなく、吾々日本國民は善い國に生れたことを痛感し、ありがたき御仁德に感泣するところあらねばならぬ。君臣の關係の我が國の如く美しい國は、他の外國にはその例を見ることは出來ない。これが二千五百有餘年間、皇統連綿として國威の伸張を來たした所以である。吾等はますくます緊張してこの國風を子孫に傳へなければならぬ。

八月四日

なにごとに思ひ入るとも人はたゞ
まことの道をふむべかりけり

明治三十七年御製——「寄道述懷」

「なにごとに思ひ入るとも」とはどんな事に志すとも の意。「人は皆各自志す道はさまざまで異なるものであるが、如何なる事に從事するとも、誠の道を踐まなければならぬ」と諭し給ふ御製と拜する。人は何事にかゝはらず誠實を旨とすべきである。誠實がなくては人との交際も圓滑に行くものでもなし、商賣も繁昌しない。勿論、立身出世などは思ひも寄らない。近頃の世の中が輕佻浮薄になつたといふのは、この誠實の精神がなくなつたからである。凡て人は浮調子になつて、表面だけをつくろふことに努めてゐる。所謂要領と體裁だけを重んずるやうになつて來たために、信實が次第に薄らいで行くのである。

八月五日

きずなきはすくなかりけり世の中に
もてはやさるゝ玉といへども

明治三十七年御製——「寄玉述懷」

「世の中に名玉であるともてはやされる玉も、よくよく見れば、瑕のない玉は少ない。卽ち社會の上に立つて人の師表と仰がれる人でも、矢張り缺點といふものはある」との御意と拜する。貞觀政要といふ書にも「君子の小過は白玉の微瑕なり」と書いてある。人に多少の缺點があるからと云つて、その人の功績や長所を沒却することは無理である。然し誰にも缺點があるから、自己の缺點も亦當然であるといふふうに考へてはならない。自己の缺點に氣がついたならば、一時も早く改むべきである。そして名實共に明鏡止水の人となるやうに修養することこそ人の道である。

八月六日

山田もるしづが心はやすからじ
種おろすより刈りあぐるまで

明治三十七年御製——「農夫」

「もる」は守る義。「しづ」はここでは農夫のこと。「やすからじ」は安心のひまはあるまい。「おろす」は播く意。「山田を守る農夫は、種を蒔いてから、刈りあげるまで安心のひまはあるまい」と農民の艱苦を詠ませ給うた御歌である。唐の李紳の詩に「禾を鋤きて日午に當り、汗滴禾下の土。誰か知らむ盤中の餐。粒々皆辛苦」といふのがあるが、この御製と同じ心と思はれる。農民の辛苦は都人士の想像も及ばぬものである。一粒の米も二百日近くの苦勞を經なければならないのである。世の中の商工業が盛んになるに從つて、農業は輕んぜられる傾きがあるが、殊に我が國は昔から「農は國の本」と云はれてゐる。

八月七日

きゝしより遠しと思ふはゆくさきに
心のいそぐ道にぞありける

明治四十五年御製——「道」

「これから某地まで幾里あるかと尋ねた時に、幾里あると聞いて歩いて見ると、心の急ぐ道であるために、聞いたよりも遠く思はれる」と、成功の急ぐ可からざることを誡め給ふ御製と拜察する。如何に急ぐ道とはいへ、あわてる時は、道に迷うて、却つて時間を費すことが珍らしくないことは、各自の經驗するところである。明治大帝も他の御製で、「歩みののろい牛の方が却つて怪我もなく躓きがない」と仰せ給ふ。假令日暮れて道遠しの感はあつても、心をおちつけて、一歩々々と踏みしめ踏みしめ行くことが堅實であり、成功の捷徑であることを忘れてはならぬ。

八月八日

いくさ人いかなるのべにあかすらむ
蚊の聲しげくなれる夜ごろを

明治三十七年御製――「をりにふれて」

「いくさ人」は軍人のこと。「夏の頃となつて、蚊の聲がしきりとするこの頃の夜に、戰場に奮戰する兵士達は、どんなところに野營をしてゐることであらう」と、出征の將士の上を思ひやらせ給ふ大御心の御發露と拜し奉る。帝國の軍人たる者、誰か感泣せぬ者があらうか。わが帝國軍人の連戰連勝するも亦故あるかなと謂ふべきである。人は思ひやりこそ肝要なれ。この思ひやりの心さへあつたならば、勞働爭議などが起る筈がないのである。他を思ひやることがなく、私慾を逞しうするところから、多くの社會の爭ひは生ずるのである。人は互に思ひやりあふこそ美しい心であらう。

八月九日

暑しともいはれざりけりにえかへる
水田にたてるしづを思へば

明治三十七年御製――「をりにふれて」

「にへかへる」は、田の水が夏の熱さのために沸ざかへること。「しづ」はここでは農民のこと。「暑さのために田の水が沸ざかへつてゐる中に入つて、働いてゐる農民のことを思へば、暑いとも言はれない」と農民の粒々辛苦を察し憐ませ給ふ御歌である。げに農民の勞苦を思ふならば、ビルディングの一室に構へて、扇風機などをかけてゐる人は、恥かしい限りである。北滿の零下幾十度の曠野に惡戰苦鬪してゐる軍人を想像したならば、吾々國民は、この暖かい內地に、而かも家の中にあつて、寒いなどゝ云はれた義理ではない。兵士や農民の勞苦を思うて自己の修業心を固めるやうにしたいものである。

八月十日

新高の山よりおくにいつの日か
うつしうゝべきわがをしへぐさ

明治四十三年御製——「をりにふれて」

「新高の山」は、臺灣嘉義の東方に聳え、我が國第一の高峯で、一にモリソン山と稱する。新高山の名は、明治三十年、明治天皇の命名し給ふところであるといふ。「をしへぐさ」は教訓の材料となるものゝ義で、ひろく教育のことをいふ。さて草といふより、山より奥に移し植ゑむと仰せ給ふ。「臺灣の山深いところには、なほ生蕃の民があつて、皇化に浴せぬことをあはれみ給ひて、いつの日かわが教を施さむ」と宣うた御歌である。臺灣・朝鮮・樺太は、我が新領土として吾等國民と等しく皇恩に浴しつゝあるのであるから、我等國民は新しき國民として特に誠實・深切を盡さなければならない。

八月十一日

寶ともいふべき玉はなくならむ
こまかに瑕をもとめいでなば

明治四十三年御製——「玉」

「こまかに瑕をさがし求めたならば、どんな玉でも瑕のない玉はないので、世に所謂寶玉といふものはなくなることであらう。故に、あまりに瑕をさがし求めることをせずに、その美點の方に心を盡せよ」との大御心を御詠じ遊ばされた御歌である。その長所を見る前に、まづ短所をさがして云々したがるのは人の共通せる弱點である。最も慎むべきことは、人の缺點を擧げてこれを貶すことである。振り返つて自己を見たならば、大きな口で人の缺點などを云ふ資格はないであらうに。あさましい限りである。人は他人の缺點を見る前に、先づ長所を見るべきである。

八月十二日

ものわすれするを常なる老人も
昔がたりはたがへざりけり

明治四十二年御製——「老人」

「物忘れするのが老人の常であるが、不思議に過去の經驗などを話す場合には、その事實を違へぬものである」との御意と拜する。老人は過去に生き、成年は現在に生き、青年は將來に生きるものであつて、過去を物語るやうになつたならば、そろ〳〵老境に入つたと見てよいであらう。老人は既に將來はないので、前途に希望を持つことはない。故に老人の心境といふものは淋しいものである。過去のありし物語を追憶して自らの心を慰めてゐるのが老人である。若い人達はよくこの老人の心境を察して、勉はり、慰めて、樂しい餘生を送らしめることを忘れてはならぬ。

八月十三日

橿原のとほつみおやの宮柱
たてそめしより國はうごかず

明治四十二年御製——「柱」

「橿原のとほつみおや」とは神武天皇を申す。鸕鷀葺不合尊の第四の神子にあらせられる神武天皇は、陸海軍を率ゐ給うて、九州の日向から瀬戸内海に入り、御東征の途に上らせられ、遂に賊徒を御征伐になつて、大和の橿原の宮に、皇祖の御位に卽かせられた。「宮柱たてそめし」とはこの皇祖の御位に卽かせられた御事を申すのである。そこでこの御歌は「神武天皇が近畿の賊を討ち平げられて、大和の橿原の宮に、皇祖の御位に卽かせられてから、わが大日本帝國の國基は些かの搖ぎもない」と、我が國家の建國の歷史を詠ませ給うた御製である。

八月十四日

重荷ひく車のおとぞきこゆなる
　　てる日の暑さたへがたき日に

明治四十一年御製――「夏車」

「夏の暑さの堪へがたい日に、重荷をつけてひく荷車の音が聞える」とその辛苦のほどをおぼしやらせ給ふ御歌である。人の一生は恰も炎天下に重い荷車を挽いて進むやうなものである。普通の心がけや努力では、浮世の波を越されない。成功の坂を上り切れるものではないのである。人が一すれば己は十を爲す覺悟がなければ世に立つことは覺束ない。世の中が進歩すればするほどこの覺悟が必要になつて來る。十年以前の社會と、十年後の社會とを比較して見る時、吾人は痛切にこの感を深くするところである。これからの少青年は層一層の努力こそ望ましい。

八月十五日

萩の戸の露にやどれる月影は
　　しづが垣根もへだてざるらむ

明治十三年御製――「月不擇處」

「萩の戸」は清涼殿にある御局の名であるが、その前庭に萩を植ゑられたところから、かく名づけられたものであらうと云はれてゐる。ここは單に禁中の御庭の義に用ゐさせ給ふ。「禁中の御庭の露に宿る月影は、農家の垣根をも隔てることなく照らしてゐることであらう」と一視同仁の大御心を歌はせ給ふ御製と拜し奉る。人は五體を具へてゐる人間といふ立場から考へれば、皆同じ人間であるが、その人の人格や財産によつて、自ら階級が生じて來る。又止むを得ない。人間は決して平等ではない。否宇宙に同じ物が決して存在しないのである。誤まつた平等觀は避けなければならぬ。

八月十六日

さしのぼる朝日のごとくさわやかに
もたまほしきは心なりけり

明治四十二年御製――「日」

「東天からさしのぼる朝日のやうに、さわやかに心を持ちたいものである」との御意と拜する。人は感情に支配され易く、從つて常に爽快な心地でゐることは極めて容易な業ではない。心配な事柄があれば、心自ら暗くなり、少し氣に合はぬことがあれば腹立たしい心持になるのが常であるが、人は亂りに外部の刺戟によつて心を動かすものではない。支那では昔、喜怒哀樂を顏にあらはさぬを以て君子の態度とした。これは少し極端ではあるが、常に明朗な心の持主は、對者に對して非常に好感を與へ、明朗なる判斷を以て事に處することが出來、從つて明朗なる人格の光が發するに至るのである。

八月十七日

すなほなる人のこゝろにくれたけの
まがれる癖はいつかつくらむ

明治四十一年御製――「心」

「くれたけ」は昔支那の吳國から渡來したと言ひ傳へられる竹で、節が近く、杖などに用ゐられる。「生れた幼兒の心は、天眞爛漫で、些かの邪惡がなく、直ぐなるものであるが、次第に成長して行くうちに、いつよこしまな癖がつくのであらう」と、人の邪惡に染みてゆくのを嘆かはせ給ふ御歌と拜察し奉る。この御製の御意の如く、家庭に於ても、社會に出ても、一人として惡を敎へる者はないのであるが、成長するに從つて何時の間にか邪惡に染つて、遂にはあらぬ道に迷ふに至る者さへある。嘆はしい限りである。世の多くの人々よ!! 邪惡に負かされる弱者となる勿れ。

八月十八日

したしみのかさなるまゝに外國の
人も心をへだてざりけり

明治四十一年御製——「國交」

「次第に親交がかさなるに從つて、外國の人と雖も、心を隔てないやうに親密になるものである」と、列國の和親の固きことを喜ばせ給へる御製と拜する。外國人と雖も、徒らに排他的の思想を以て、異國人扱ひをするものではない。鎖國排他の思想は明治維新以前の我が國民の古い思想である。黒船々々と叫んで攘夷論を唱へたのは最早六十年以前の昔の夢となつた。頑迷なる國家社會主義の思想を抱いて、排外的態度を採るものは、宏量の國民とは謂はれない。國内は固く〳〵一致協力の手を握り合つて、更に世界の人々と堅き握手をかはす國民こそ進歩したる國民である。

八月十九日

いさをある人のあとをもたづねけり
縣の里の旅にいでつゝ

明治四十年御製——「をりにふれて」

「いさを」はてがら・勳功。「縣の里」は地方の義。「地方に行幸せさせ給ひて、國家の功臣の舊跡を訪はせ給ふ」との御意。明治大帝には畏れ多くも、湊川神社に行幸遊ばされて、御親しく楠木正成の忠誠を思召され、又、水戸の常盤神社を御訪ね遊ばされて、德川光圀の功績を嘉せさせ給ふ外、國家に勳功あつた忠臣の遺跡を御訪ね遊ばされ給ふことは屢〻であつた。下國民たる吾々も亦 明治大帝の御聖德を奉じて、國家の忠臣を追慕して、これを見習ふやうにしたい。これ等忠臣の功績こそは、動ともすれば怠慢放逸に流れむとする心の善き清涼劑である。

八月二十日

たらちねの親の心をなぐさめよ
國につとむる暇ある日は

明治四十年御製——「親」

「たらちねの」は親の枕詞。「國家に勤めて暇のある日は、親の心を慰めよ」と忠孝兩全の意を歌はせ給ふ御製である。近來の若い青年達は、暇さへあれば、登山とかスキーとか、ハイキングなどに費すのであるが、その十分の一の暇を利用してもよい。親を訪ねて慰めたならば、親はどんなにか喜ぶことであらう。自分の心を樂しまし、自己の身體を健康にするための登山・スキーであるならばよいが、徒らに流行を追うて、自分だけの慾心を充たし、更に親を顧みないやうなことでは、如何で孝子と謂はれようか？　親に不孝なる子は、君に對しても亦不忠なる所以である。

八月二十一日

事そぎてあればある世と思ひけり
旅のやかたに日數かさねて

明治四十年御製——「旅宿」

「事そぎて」は物事を簡略にしての意。「旅のやかた」は旅舍卽ち行在所のこと。「行在所は所狹くて、萬事簡素にしても、それでも日數かさねて過し得られることである」との御意と拜し奉る。人間生活は贅澤をすれば際限のないものであつて、九尺二間の長屋に住んでも、結構生活が出來て、さして狹いとも感じないものであるし、又、大邸宅に住ひしても、それほど廣いとも感じなくなる。これを經濟生活に見るに、二百圓でも生活が決して充分であるとは言へない。又、五十圓でも結構生活が出來るものである。須らく虛榮を捨てゝ儉素節約を旨とするのが戊申詔書の御旨にかなふ所以である。

八月二十二日

たねなくて茂りもゆくか世の中の
人のこゝろのものわすれぐさ

明治三十九年御製——「忘草」

「わすれぐさ」は萬葉集卷三に「わすれ草わが紐につく香具山のふりにし里を忘れぬがため」とある。萱草の古名で、文選卷六の註に「萱草憂を忘るゝなり」とあるところから名づけた。然るに、ここには、物を忘れる種子の意に用ゐさせ給ふ。草といへるところから、種・茂るなどの緣語を用ゐ給ふ。「ゆくか」は行くことかなの意。「世の中の人が物忘れ多いことである」との御意と拜する。明治大帝の御記憶に富ませ給ふことは、諸大家の謹話に伺ひ奉られることである。成年から老人になるに從つて次第に記憶力が減退するものであるから、學問などは記憶力の盛んな少青年時代に於てなすべきである。

八月二十三日

親も子もうちつどひてやいくさ人
ことしは家の花を見るらむ

明治三十九年御製——「をりにふれて」

「日露戰爭もめでたく大勝を博して今は凱旋の身にある軍人は、今年は親も子もうちそろつて花を見ることであらう」と、國民の一家團欒を嘉させ給ふ御製と拜する。世界の平和も、一國の安泰も皆その根元は一家團欒にあるのである。殊に我が國は家族制度を旨とし、西洋の個人主義とはその趣きを異にしてゐるのであつて、法律・制度はこの家族制度を根本として樹てられてゐる。親も子も、兄弟も、姑も嫁も仲よくうち笑うて樂しく暮すことは、何と幸福な生活であらう。一家團欒の生活が合して、泰平に治まる國が生れるのであることを考へれば、我々は家庭生活を忽せにすべきではないことが肯けるであらう。

八月二十四日

みな人の見るにひぶみに世の中の
あとなしごとは書かずもあらなむ

明治三十八年御製——「新聞紙」

「ひぶみ」は新聞紙のこと。「あとなしごと」は無根の事實。「書かずもあらなむ」は書かずにあれよと囑望し給ふ辭。「世の中の多くの人々が見る新聞紙に、事實無根な記事を書かぬやうにせよ」と御諭し遊ばされ給ふ御製である。吾々はこの御製を拜誦して、我々も事實無根の事を噂として世間の人々に話したことがないかを考へなければならない。世間の噂には事實もあれば、事實無根の事もあるであらう。故に世間の噂をそのまゝ信ずることは輕卒であり、これを又他の人々に言ひ傳へることは、更に愼むべきことである。世間の噂を聞いた時は、それは單なる噂と聞いておくべきである。

八月二十五日

秋風や吹きかはしけんしの薄
そむきし方にうち靡くなり

明治三十八年御製——「薄隨風」

「秋風が北から吹けば、薄が南に靡き、南から吹けば北に靡いて、薄は風のまに〳〵うち靡く」との御意と拜する。この御製を拜して我々は事大思想といふことを聯想させられる。見識のない人は、恰もこの薄のやうに、世の風潮のまに〳〵生活して行く浮草のやうなものである。斯くの如き人はまた有力者や富豪などに接しては、節操もなく阿諛と追從の安賣りをする。識見のない人ほど世に哀れな者はない。人は努めて學問をし、社會を研究して確固たる識見を持ち、濫りに世の風潮に靡くやうなことがあつてはならない。そこに牢乎として動かす可からざる人間の尊さがあるのである。

八月二十六日

まつりごといでゝきくまはかくばかり
あつき日としも思はざりしを

明治三十八年御製——「夏述懷」

酷暑の間も、その暑さを忘れ給ふばかり、國事に精勵し給ひしほどを伺ひ奉るべき、いとも畏い御製である。畏れ多くも明治大帝に於かせられては、夏の暑さに避暑もし給はず、酷寒の候にもストーヴを御用ゐ遊ばされず、政務に御精勵遊ばされ、下國民の上に海嶽の如き御仁德を垂れ給ふ。畏しとも畏き極みに拜し奉る。この御製を拜誦しては、如何なる懦夫も躍然として起つことであらう。苟しくも遊惰に日を送り、安逸を貪る徒輩があらば、速かに心を改めて、人の踐むべき誠實の道に入り、明治大帝の宏大無邊なる御仁德に黙して、報い奉るところがなければならぬ。

八月二十七日

わけばやと思ひ入りぬる道にしも
高きしをりのみえそめにけり

明治三十七年御製——「折にふれて」

「わけばやと」は分け入りたいとの義。「しをり」は道しるべ、指標などの意。「かういふことをやつて見たいといふ志さへ立てるならば、同時にその道は開けるものである」との微妙の眞理を詠ませ給うた御製である。凡て事業でも學業でも、まづその志望を確立することが第一であつて、經濟的な問題は自ら解決し、又、援助者も出來て來るものである。たゞその志を立てる時にあたつて、凡ての方針を研究し、他人の意見も聞いて、これならば必ず實行し得て、最後までやり通すといふ固い〳〵決心が必要である。輕々しく計畫を樹てることは失敗の基である。

八月二十八日

世をおもふ心の雲もうちはれて
こよひさやけき月をみるかな

明治三十五年御製——「月を見て」

「心の雲もうちはれて」とは、國を思召されて、叡慮を惱まし給ふことも絶えての意。「國家の上を思召されて、叡慮を惱まし給ふことも絶えて、今宵の晴れた月を見ることである」と、月に縁ある雲に託して叡慮のほどを詠み給うた御製と拜し奉る。一日の勤めを終へて家庭の人となつた時、或は苦心慘憺たる事業を成し遂げた時の人の心は、どんなにか愉快に朗かなことであらう。これは努める者、苦しむ人にのみ與へられる幸福であつて、遊惰・不誠實の者の味はひ知られない境地である。神は誠實の道を踐む人、艱難の波を乘り越した人にのみこの幸福を與へ給ふのである。

八月二十九日

いそのかみ古きためしをたづねつゝ
新しき世のこともさだめむ

明治三十七年御製——「折にふれて」

「いそのかみ」は古きの枕詞。「ためし」はしきたり、例などの意。「たづねて」は調べて、研究してなどの義である。「神代ながらの古い例をよく〳〵研究してから新しい世の中のことを定めよ」との御諭しと拜し奉る。明治御大政の根本の一は、この御製に歌はせられ給ふとぞ申すべきである。我が國には神代に於ける建國精神を基礎とする新しい制度でなければ、恰も砂中に樓閣を築くやうなものである。個人の一身にあつても亦その通りで、自分の性質と過去の經歷とをよく〳〵考へた上に新しいことを試むべきで、それを無視して新しい事を試みるは失敗の基をつくるものである。

八月三十日

うつせみの世のためすゝむ軍には
神も力をそへざらめやは

明治三十七年御製——「折にふれて」

「うつせみの」は現し身で、世の枕詞。「世のため」は世界人道のための義。「やは」は反語で、添へずあらうか、否必ずそへられると強くいふ意味である。「世界人道のために進む戰爭には、神も力を添へずあらうか、否必ずそへられる」と、日露戰爭に對する御信念を詠み給ふ御製である。凡て人間は事をなすに當つて、一大確信と信念とが必要である。その確信と信念には、神もこれを照覽あらせられて、必ずや成功の山に導いて下さることであらうと信ずる。神助や天祐といふものは、人間のかうした確信と信念に對してのみ、初めてあらはれるものである。

八月三十一日

こらは皆軍のにはにいでは てゝ
翁やひとり山田もるらむ

明治三十七年御製——「田家翁」

「子は皆北滿の地に出征してしまつて、年老いた老人が一人、山田の刈入れをしてゐることであらう」と田家の老人の上を思召されての御製と拜する。當時たつた一人の子息が召集されて、遠く北滿の地に出征したために、殆んど自失せむばかりに悲んだ老翁が、この御製を拜して、明治大帝の御聖德に感激し、再び農業に勵むやうになつたといふことを聞き及んでゐる。まことに御製の德は、田野の一老翁を感泣せしめたのであつた。この御製は人口に膾炙されてゐる御歌であるから、國民たる者は等しくこれを諳記して、洪大無邊なる 明治大帝の御盛德を偲び奉るやうにしたい。

九月一日

まへになりうしろになりて雛まもる
たづの心のあはれなるかな

明治四十一年御製——「鶴思子」

「たづ」は鶴の古語、鶴はよく田におりる故にいつた名稱である。「あはれ」は、情趣の深いさまをいふ。いたましいといふ意味ではない。「雛のあとになり、うしろになつてまもる親鶴の心が情趣深くある」との御意と拜し奉る。動物に於ける親子の情愛は、單に本能と片附けてしまふ可きであらうか。斯くの如く鳥類さへも親がその子を慈育する情愛が極めて緻かである。況してや人間に於ておや。子は自己の延長であることを思へば、より大きな慈育の勞を執る可きことは勿論であるが、さりとて、子供は自己の所有物ではない。子は子としての天地に生きて行くものであることを自覺するのが肝要である。

九月二日

やすくしてなし得がたきは世の中の
人のひとたるおこなひにして

明治四十年御製——「行」

「やすくして」はたやすいやうでの意。「人の人たる」は人が人として十分恥しからぬの意。「たやすいやうでなかなかなし難いのは、人が人として十分恥しからぬ行ひをすることである」との御意と拜する。一言に人の人たる行ひと言へば、定まつたことで、極めて容易なやうに見える。例へば君に忠義を盡せ、親には孝行すべきである。互に信義を重んじて、苟しくも虚僞の言動があつてはならぬ。また夫婦の別を立て、兄弟相助けあふといふことは、人間として當然爲すべき事で、極めて平易なやうであるが、いざ實行となると、以上の中一つを守ることすらなかなか容易な業ではないのである。

九月三日

たらちねの親につかへてまめなるが
人のまことの始なりけり

明治四十年御製――「孝」

「たらちねの」は親の枕詞。「まめ」は忠實誠心であることをいふ。「親につかへて忠實誠心なることが、人の誠の道を踐む第一歩である」との御意と拜する。げに孝は百行の本とかや。親に對して孝なる人は、人に對して信實であり、從つて信用が篤く、事業や商賣は隆昌に赴き、いざ一朝國家に有事の際には、一身を鴻毛の輕きに置きて忠勇を挺んづる人であることは、社會の多くの實例が示すところである。如何に社會的に名を擧げるとも、月桂冠を贏るとも、不肖の子であつたならば、何程の人間的價値があらうぞ。世に偉人・賢人と稱される人に、決して不孝の人はないのである。

九月四日

めにみえぬかみの心に通ふこそ
ひとの心のまことなりけれ

明治四十年御製――「神祇」

神は決して凡俗の目には見えるものではない。然し神は儼然として存在するのである。茲には神の存在を證明すべき遑はないが、神國日本に生れて、神の存在を疑ふやうでは、自己の心の修養に自信のない證據である。この神の存在といふことを確信せぬ人は、一朝事ある時に、周章狼狽の醜態を演じ、眞に事業の大成を爲し得ぬ人である。神は全知全能のものであつて、人間の至誠が神に通ずるものである。かくして人間の行爲が誠といふ域に達し、正しき人、立派な人と仰がれるのである。至誠神に通ずとは古來の名言で、吾人は一日も忘るべからざることである。

九月五日

國のため身のほど〳〵に盡さなむ
心のすゝむ道を學びて

明治四十年御製——「心」

「身のほど〳〵に」は身分相應にの意。「心のすゝむ道」とは己の心に適つた方面、卽ち政治が好きであるなら政治家となり、官吏を望むならば官吏となり、軍人が志望ならば軍人となり、宗教家がよければ宗教家となり、各々その好む方面のこと。「自分の希望し又適する方面を學んで、身分相應に國家のために盡せよ」との御意と拜する。必ずしも軍人でなければ國家のためにならぬといふことはない。農夫が農業に勤しむのも、大工が建築を勵むのも、皆等しく國家のためである。また婦人が家庭に在つて育兒・其他に專心するのも亦國家のためである。たゞ己が業務に勤しむこそ肝要である。

九月六日

たらちねのにはの教はせばけれど
ひろき世にたつもとゐとぞなる

明治四十年御製——「庭訓」

「にはの教」は家庭教育のこと。「家庭教育は一家の狹いところで行はれるものであるが、廣い社會に立つ基となるものであるから、重んじなければならぬ」との御諭しと拜する。教育は學校教育と家庭教育と兩々相俟たなければ完全なる教育は行はれない。殊に家庭にあつては、父が外に出て活動するものであるから、常に家庭にある母がその子の教育に就いては特に深甚なる注意を以てしなければ、その實が擧るものではない。中江藤樹の母、乃木將軍の母などは家庭教育者の龜鑑とすべき賢母である。賢母のもとに、偉人・賢人があることは歷史が明かに證明するところである。忽せにすべからざるは家庭教育である。

九月七日

事しあらば火にも水にもいりなむと
思ふがやがてやまとだましひ

明治四十年御製——「述懐」

「ことし」の「こと」は一旦緩急あること。「し」は意味を強める辭。「一旦緩急ある時は、君のため國のために義を富嶽よりも高く持し、身を鴻毛よりも輕んじて、火水の中と雖も辭することなく入らむと思ふのが、卽ち日本魂である」との御意と拜する。日本魂は和魂とも書いて平和・和順を意味するものである。荒魂のやうにあれすさぶものを謂ふのではない。世界の平和・人類の幸福を願ふのが卽ち日本魂であるが、苟しくも世界の平和を紊し、人類の幸福を害せんとする者に對しては敢然として起つ。これが眞の日本魂である。吉田松陰の辭世に「斯くすれば斯くなるものと知りながら、やむにやまれぬ日本だましひ」と。

九月八日

ひとりして早瀨をくだす筏には
かへりて波もかゝらざりけり

明治四十年御製——「筏」

「大船は波にあたり易いものであるが、一人で早瀨をくだる筏の方が却つて波がかゝらぬものである」との御意と拜する。吾人はこの御製を拜誦して、「大木は風にあたり易し」といふ世の諺を想起するのである。小木は風にあたること尠ない故に、スク〳〵と生長するが、大木は風のために妨げられて、生長思ひのまゝにならぬ。人も亦その通りである。名もなき人は比較的世間の注視を受けること尠なく、割合に安全な生活道を辿るものであるが、社會に名の知られたる人も、恰も海に於ける大船の如く、どうしても社會の注視の的となり易く、從つてその行路に幾多の險難が迫りがちである。

九月九日

大空につばさをのべてとぶ鳥も
ねぐらに迷ふときはありけり

明治四十年御製——「鳥」

「廣き空に、自由に翅をのべて飛び翔る鳥でも、時としては、己が宿るべき塒に迷ふことがある」との御意と拜する。一世を誇つた富豪も、僅かの蹉跌から、遂に路頭に迷ふ實例は決して珍しいことではない。名位を贏て權勢竝ぶ者なき人でも、その晩年を養老院の一室に、一人淋しく佗住居する人もある世の中である。吾人はこれ等の人々をよく研究して、何故にかゝる悲運に遭遇するかを考へなければならぬ。誠の道さへ踐めば、決してかゝる境遇に沈淪する筈はないのであるが、心の迷から邪道に踐み入つたり、思慮を欲いたために失敗を招いだことがその原因をなしてゐるのである。

九月十日

波風をしのぎ〳〵て荒磯の
松はちとせの根をかためけむ

明治四十年御製——「磯松」

「荒磯の松は、寄せ來る波風をしのぎ〳〵して、千年の根をかためる。人も亦世の困難にうちかつて、大人物となつて大成しなければならぬ」との御諭しと恐察し奉る。人生の行路大抵は六七十年の間ではあるが、少年の時には少年の時の誘惑があり、青年時代にはまた青年相應の艱難に遭遇する。また社會に出でゝは、更に〳〵大きな誘惑と艱難とが虎視眈々として待つてゐる。この複雜なる社會に立つて、これ等の誘惑や艱難と戰つて、眞に最後の勝利を得るには、非常なる忍耐と努力とが必要である。普通以上の人となるには、必ずや普通以上の堅忍不拔な精神を以て奮鬪する覺悟がなければならぬ。

九月十一日

山川のながれは末になりぬれど
にごらぬ水は濁らざりけり

明治四十年御製――「水」

「すべてのものは、末になれば濁る習ひであるが、清い山水の流れは、末になつても濁らぬ水は濁らぬものである」との御意。「郷に入つては郷に從ふ」といふ世の諺の通り、惡い意味に於ても亦朱に交はつて赤くなり易く、清廉の人も濁世の中に入れば、兎角その仲間入りをするのが常である。卽ち人はその還境に支配され易いものである。然し偉人・賢人は決してその還境や境遇に支配されぬものである。澆季の世になればなる程その人格を顯はすこと、なほ泥中の蓮の花の如く、ます〳〵その清廉高潔を發揮するものである。人は常にこの確固不拔なる精神を持つこそ、何よりもよき寶である。

九月十二日

ひらかずばいかで光のあらはれむ
こがね花さく山はありとも

明治四十年御製――「鑛山」

「こがね花さく山」とは、昔、天平勝寶元年に、今の陸前金華山から黃金を產出したことがあつて、萬葉集にこの事を詠じた大伴家持の長歌並に短歌がある。その中に「すめろぎの御代の榮えむとあづまなるみちのく山に黃金花咲く」とある歌により給ふ。この御製を拜誦して吾人は　昭憲皇太后陛下の御歌「金剛石も磨かずば玉の光りはそはざらむ。人も學びて後にそ云々」を思ひ起すのである。「天然自然に黃金の花が咲く山があつても、人力を以てこれを開かなかつたならば、土中深く埋もれて、何の甲斐もない。」との御意。天性如何に怜悧の人も、學問修養がなかつたならば、遂にその才能を發揮することが出來ない。

九月十三日

さま〴〵の野菊の花のしどけなく
うゑたる庭のおもしろきかな

明治四十年御製——「をりにふれて」

「しどけなく」とは、規則正しからず、無雑作にといふほどの意。「うるはしく作つた庭園よりも、野菊などのたぐひを無雑作に植ゑた庭が、かへつて趣があつて、おもしろいものである」との御意と拝する。徒らに人工を加へる時、そこに却つて下品が伴ふものである。自然のまゝの風物、そこになんとなく云ひ知れぬ風韻がある。高尚さがある。萬艦飾を施した人物よりも、その人本來の性質を重んじた服裝の方が、より上品に見えて、何處となく奥ゆかしく見えるものである。人の言動も亦同じく、徒らに世辭追從をいふよりも、己が本心から出た言葉が最もゆかしく響く。

九月十四日

かみかぜの伊勢の宮居を拜みての
後こそきかめ朝まつりごと

明治三十九年御製——「神祇」

「かみかぜの」は伊勢の枕詞。「朝まつりごと」は朝政卽ち政治。「朝はまづ皇大神宮を遙拜して、祖宗の御加護を祈り給ひ、而して後、政治の裁決をしたまふ」旨を御詠じ遊ばされ給ふ。敬神崇祖の深き大御心のあらはれたる御製と拜し奉る。國民は果して毎朝伊勢の大廟と祖先の靈とに禮拜をなしつゝあるか。若しこれをなさぬ人があるならば、本日から早速實行するやうにしたいものである。敬神崇祖の心ない者は、我が國民として一大恥辱であるばかりではない。不信の心起り、どうしてもあらぬ道に踏み迷ひがちである。敬神崇祖の精神に富みたる人こそ眞の行爲をなすべき人である。

九月十五日

世の人にまさる力はあらずとも
心にはづることなからなむ

明治三十九年御製――「心」

「なからなむ」はなくあれよかしの義。世の中の人々に勝る力はなくともよい。たゞ〳〵心に恥づることのないやうにせよ」との御意と拜する。如何に一世に名を擧ぐるとも、人の道に缺けるところがあつては、寧ろ平々凡々の人にも劣る。人は萬人にすぐれて名を擧ぐることは望ましいことであるが、人各々その具はれる才能があつて、凡ての人が皆萬人に勝れることは不可能である。己の才能を顧みずして、徒らに衆に優れることを希望し、これを實現せむとすれば、必ずや無理が生ずるものである。強ち衆にすぐれずとも、人間としての道を踐み違へぬ人こそ、先づ以て立派な人と謂ふ可きである。

九月十六日

よものの海なみしづかなる時にだに
なほ思ふことある世なりけり

明治三十九年御製――「述懷」

「よものの海」は四海の意で、ここは世界のことゝ拜し奉る。「なみしづかなる時にだに」の「なみしづか」は少しの風波もたゝぬ極めて平和の意。「時にだに」はかゝる時でもなほの義。「世界の平和な時ですらなほ心にかゝることがある」との御意と拜する。國家のために絶えず御軫念遊ばされる大御心の畏くも畏き極みである。釋迦はこの世を苦の世界であると云つた。人はどんな時でも何か心に心配のない時はない。幸運の絶頂にある時でさへもなほ苦はあるものである。この心配がなければと希望して、その苦がなくなつた時に、更に次の心配が待つてゐる。人間は常に苦と闘ふ覺悟が必要である。

九月十七日

こゝろざす方を定めて皆人の
世にたつ道にまどはざらなむ

明治三十九年御製――「道」

「まどはざらなむ」は迷ふこと勿れの意。「自己の志望する方向、卽ち政治家なり、官吏なり、或は建築業なり、宗教家なりの身を立てるべき方面を慥と決定して、處世の道を迷はぬやうにせよ」との御諭しと拜する。人は大抵小學校を卒業する時位から、自分の進むべき道を選び定めなければならぬ。何業に拘らず、その道に入つて身を立てるには尠くとも十年の修業は必要である。大學を卒業するには十二三年を要する。それから社會に出て五六年乃至十年の經驗を經なければ、社會の役には立たぬ。中年に及んで未だに自己の進むべき進路が定まらぬやうなことでは、立派な人となることが到底出來ない。

九月十八日

小山田の畔のほそ道細けれど
ゆづりあひてぞしづは通へる

明治三十九年御製――「細徑」

「畔を讓る」は史記、五帝本紀、虞舜の條に「舜歷山に耕す。歷山の人皆畔を讓る」とある故事。「世の中がよく治まつて、農夫の間には禮讓の心ある」を嘉し給ふ御製である。世の中に禮讓の心がもう少し充ちてゐたならば、これほどまでに爭ひがなくて濟むことであらう。互に讓り合ふ。何んと美しい心であらう。何んと氣持のよいことであらう。お互に自己の慾心や權力といふものを抑へて、禮讓の美德を發揮したならば、醜い裁判沙汰なども、その影を沒するであらうに。何故人間は互に禮讓といふことを重んじないのであらうか。

九月十九日

ひさかたの空はへだてもなかりけり
つちなる國はさかひあれども

明治三十九年御製——「天」

「ひさかたの」は天・空などに冠せる枕詞。「國土には國堺があつて、さまゞな國に分れてゐるけれども、天は廣漠として限りや界がないものである」との御意。げに人の心は天の如くありたいものである。甚しきは個人々々が互に牆壁を作つて、自己の堅壘だけを守り、些かも他を顧ることをせぬ人々が、世の中に多くある。何と狹い量見であらうか。せめて同じ大日本帝國といふありがたい國土に生れた人間同志なりとも、この天のやうに廣い心を以て、互に助け扶けられつゝして、君のため、國のために一致協力、益々國運の發展に盡したいものである。

九月二十日

物學ぶ道にたゞ子よおこたりに
まされる仇はなしとしらなむ

明治三十八年御製——「をりにふれて」

「學校の生徒達よ、怠慢にまさる仇敵はない。心一すぢに學問の道を勵め」との御諭しと拜し奉る。近來學生は殊に學問を輕んじ、寧ろ社交に重きをおくやうな傾向があるのは、決して喜ぶべき現象ではない。「學生々徒御斷り」などゝいふ札をかけられる程最近の學生の品行が疑はれて來たのである。學生は學問を勵むのが業務である。一心不亂に勉强すれば、己れの本分が盡されるものである。社會人のやることは、學業の成つた曉に於ては自由に出來ることで、決して周章る必要はない。たゞたゞ心靜かに學業に勤しむ時であるといふことを胸裡深く刻して忘れぬやうにすべきである。

九月二十一日

おのづから仇のこゝろも靡くまで
誠の道をふめや國民

明治三十八年御製――「をりにふれて」

「仇敵の心もおのづから靡くまで、正義の道をふみ行へ國民よ」との御諭しと拜し奉る。昔宋の文天祥が元に囚へられて降伏を勸告されたが、元主の面前に於て、忠臣は二君に仕へざる旨を滔々と誰憚るところなく述べた。流石の元主も彼れ文天祥の誠忠に感じて、首を刎ねることを躊躇したといふことは有名な話であるが、鬼神をも泣かしめずには止まぬ正義・誠意といふものは、必ずや仇敵と雖も感ぜぬ道理はないのである。天地に恥ぢざる心、千萬人と雖も我往かむといふ誠の心を以てすれば、天下何物をも動かさずに歇まぬものである。吁!! 尊さは誠の道である。

九月二十二日

世の中にことあるときぞしられける
神のまもりのおろそかならぬは

明治三十八年御製――「神祇」

「おろそかならぬ」は疎略ならぬ事はの意。「神は常に護り給ふものであるが、一朝有事の際には、特にその御威德のほどが顯著である」との御意。吾人の過去を靜かに顧みる時、神の助けであつたと思ふやうなことは、必ず一度や二度はあるものである。決してこれは迷信ではない。急行列車から赤ん坊が墜落して傷一つ負はなかつたといふことは稀に聞くことである。一時間何十哩といふ速力で走る汽車から落ちて、少しも傷つかぬとは、凡ゆる科學を以てしても解決のつかぬ事であらう。強ち幸運であつたからとつい去る可き問題ではない。必ずや神の助けであることに心づかねばならない。

九月二十三日

なよたけはすなほならなむうつせみの
世にぬけいでむ力ありとも

明治三十八年御製――「女」

「なよたけ」は柔軟な竹のことで、婦徳の柔順を主とする方より比喩し給ふ。「すなほならなむ」は柔順であるべしと教訓し給ふ。「うつせみの」は世の枕詞。「世」には世間の義と、竹の節とを兼ねて用ゐさせ給ふ。「柔軟な竹は、世の中にぬけでるべき力があつても、柔順であれ」、卽ち、婦徳の柔順を主とする旨を御諭し給ふ。婦人の出しやばりといふことは、我が國では尊ばれぬことである。西洋諸國の風習はいざ知らず、我が國では夫唱婦隨を以て風習とし、婦人は貞順を以てその鑑とする。近來男女同權など叫ばれてゐるが、夫婦の間で權利義務が叫ばれるやうでは、眞の家庭とは謂はれないのである。

九月二十四日

思ふことおほかる中にをりくは
なぐさむこともあるよなりけり

明治三十八年御製――「述懷」

「國のため、民のために御物思ひのしげき中にも、折々は又、御心の慰み給ふこともある」との御意と拜し奉る。この御製を拜誦して、吾々の心に感ずべきことは、先づ奮勵一番することである。生存場裡に立つて、惡戰苦鬪する身は、決して悲觀してはならぬ。秋には散り布く木も、また春に逢へば、撩亂たる花をつける時節も來るものである。寄せ來る苦難が如何に多くとも、乘り切つてこそ、彼岸に到達するものである。人生の行路は平坦ばかりでない。坂に次ぐに又坂を以てするのが常である。誠の心を以て奮鬪努力してこそ、成功の實を結ぶのであるといふことを忘れてはならぬ。

九月二十五日

とる棹のこゝろ長くもこぎよせむ
蘆間の小舟さはりありとも

明治三十八年御製――「蘆間舟」

「蘆の生ひ茂つてゐる間を、漕ぎ進む小舟のやうに、あちらこちらに障碍があつても、手にとる棹の長いやうに、心を長く持つて、成功を急がず、而も最後の目的地に達せよ　との深き大御旨の御製と拝する。スピード、スピードと謂つて、何事も高速を崇ぶ世の中ではあるが、人の成功だけはスピードは禁物である。一躍百萬長者にならむとしたり、一朝にして高位高官たらむと志す者は、必ずや大失敗のどん底に顚落することがあるであらう。一歩々々深甚なる思慮をめぐらし、努力に次ぐに努力を以て確實なる地歩を占めて行くこそ、最後の勝利を得る者である。

九月二十六日

さまゞの玉をあつめてきずなきは
えがたきものとさらにしりぬる

明治三十八年御製――「玉」

畏くも　明治大帝には、玉を愛でさせ給ひて、お床かざりに、はた御机の上にも置かせ給ふと洩れ承はる。「玉をあつめさせ給ひて、よくみそなはすに、それぐいささかの瑕はあるものであるといふことを今更に知り得たり」との御意と拝し奉る。人も亦この御製の通りである。如何なる賢人・名將も何處かに、いさゝかの缺點のない人はない。況してや凡人においてをやである。長所よりも缺點の多いのが常である。故に一日も修養を怠らず、その缺點を無くして長所の多い人となるやうに心がけなければならぬ。又、徒らに人の短所だけを見てその人を捨てるべきではない。

九月二十七日

生ひたちし縣によりてかはりけり
同じやまとの人のことばも

明治三十八年御製――「詞」

「縣」は地方の意。「やまと」は日本のこと。「同じ日本の國土に生れても、その生長した地方によつて、その言葉が異なるものである」とおのづから方言あるを詠ませ給へる御製である。最近は交通が便利になつて、方言が次第になくなる傾向にあるが、それでもまだ〳〵國訛りや方言がある。これは決して未開とか下等を意味するものではないのであるから、地方言葉であるからとて、人を笑つたり、輕蔑したりすることは最も慎むべきことである。東京地方の人はよく田舍言葉であるとて笑ふ風習があるけれども、却つて自己の輕薄を裏書するやうなものである。

九月二十八日

家富みてあかぬことなき身なりとも
人のつとめにおこたるなゆめ

明治三十七年御製――「折にふれて」

「あかぬことなき」は足らぬことなきの意。「おこたるなゆめ」はゆめ〳〵怠るなの意。「身に巨萬の富を有し、日常の生活には何不足ない身分であつても、人としてのつとめは決して怠らぬやうにせよ」との御誡めと拜し奉る。「小人閑居すれば不善を爲す」とは古來の名言である。身は物質に不自由のない人所謂有閑階級の人々といふ者は、兎角あらぬ道に踏み迷うて、新聞の三面記事を賑はすことが決して稀ではない。ダンスホールに通ふ閑があらば、まづ親の機嫌を伺ひ、役者に戯れる費用を以て、貧苦に惱む人々を助けてやるやうにしたならば、その積德果して幾何ぞや。

九月二十九日

戰のにはにたふれしますらをの
魂はいくさをなほ守るらむ

明治三十七年御製——「折にふれて」

「戰のには」は戰場の意。「ますらを」は丈夫・軍人のこと。「戰場に於て名譽の戰死を遂げた勇士の英魂は今もなほわが戰運を守つてゐることであらう」との御意である。楠木正成は「七度この世に生れて朝敵尊氏を滅ぼし、宸襟を安んじ奉るべし」と言つた。この正成の言葉を單なる形容と見るべきではない。人間の死とは、たゞその形が變るに過ぎないのである。形骸はなくとも、その靈魂は永久に不滅なものであるといふことを確く〳〵信じてゐなければならぬ。そこから眞の孝行が生れ、誠の忠義が生ずるのである。死を人生に於ける一切の終局と觀る人は刹那主義の輕薄兒である。

九月三十日

すゝむべき時をはかりて進まずば
危き道にいりもこそすれ

明治三十七年御製——「折にふれて」

「いりもこそすれ」は若しか入るかも知れぬの義。「こゝが進むべき時機であることをよく〳〵見きはめて進まなければ、危き道に入るかも知れぬ」との御意と拜し奉る。物事には凡て時機といふものがある。徒らに心はやつて進まむとしても、到底成功するものではない。「凡ては時が解決する」といふ格言があるが、蓋し名言である。自然界の植物を見てもさうである。春に芽をふいて、花が咲き、秋には實を結んで、落葉し、また翌年を待つ。人事も亦この時機を無視する時は、徒らに努力を要して何の效果も擧らぬのみか、却つて思はぬ大失敗を招來することがあるから、くれ〴〵も注意しなければならぬ。

十月一日

家の風ふきそはむ世もみゆるかな
つらなる枝の茂りあひつゝ

明治三十七年御製――「兄弟」

「家の風」は家風の義で、家名を擧ぐることを、家の風吹きそふと御詠じ遊ばされ給ふ。「つらなる枝」は連枝で、兄弟を一樹に比して、枝を連ねることに譬へる。「兄弟が互に助け合ひつゝ、家風を擧げることが見える」との御意と拜し奉る。菅原道眞の母が、道眞が家名を擧げむことを願つて詠んだ歌に「久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな」といふのがあり、又、前大僧正賴意の歌に「住のえの松もさか行く色みえて、連なる枝にかゝる藤なみ」といふのがある。「兄弟牆に鬩ぐ」といふ諺がこの世から消されるやうに、兄弟仲睦じくしなければならぬ。

十月二日

世の中の事ある時にあひてこそ
ひとの力はあらはれにけれ

明治三十七年御製――「人」

「平常人の力量といふものは判らないが、一朝有事の際に臨んで、初めてその人の力量といふものがあらはれるものである」との御意と拜し奉る。日常の人の交際に於ても亦その通りである。平常極めて昵懇にし、兄弟も及ばぬやうな交際をしてゐる間柄でも、一朝何か對手方に不慮の災禍でもあつた場合には、案外な態度をすることが多い。さうした場合に初めてその人の眞意があらはれるものである。誠實の心ない人は、知人の災に對して拱手傍觀の態度をとり、誠實の心ある人は、肉親も及ばぬ好意を盡す。有事こそ誠實を計るべきよきバロメーターである。

十月三日

籠のうちさへづる鳥の聲きけば
放たまほしく思ひなりぬる

明治三十七年御製——「籠中鳥」

「籠の中に美音を發して啼く聲を聞けば、放してやりたいと思ふ」との博愛の大御心を御詠じ遊ばされ給うた御製と拜し奉る。小さな籠の中に飼つて、人はその啼く音を樂しむが、鳥の身になつて見れば、自由を束縛されて迷惑この上もない話である。我が國には恰も籠中の鳥のやうな境遇にある人々が澤山ある。外でもない公娼といふものである。最近公娼廢止が叫ばれて、次第にこれが實現を期されることであらうが、これを樂しむべき不心得者さへある。世に所謂忘八といふ者がこれである。何とあさましい限りではないか。一等國の國民として大いに恥づるところがなければならぬ。

十月四日

むらぎもの心むなしき吳竹は
しらず〳〵や千年へぬらむ

明治三十七年御製——「竹」

「むらぎもの」は心の枕詞で、群臟腑の凝るといふ義であるといふ。「吳竹」は支那の吳の國に產する竹で、節が近く、杖などにする竹。竹は中空虛であるところから、心むなしなど古人も謂つた。「中の空虛な吳竹が、知らず識らず千年の年月を經るものである如く、人間も虛心なるが長壽のもとである」との御意と拜し奉る。心の煩ひが健康に最も有害であることは、世人の經驗するところであらう。世の長壽者を見るに、何れも闊達な心を持ち、くよ〳〵せぬ心の持主である。小事に拘泥することなく、極めて暢氣に生活するのが長壽の祕訣であることを忘れてはならぬ。

十月五日

遠くとも人のゆくべき道ゆかば
危き事はあらじとぞ思ふ

明治三十七年御製——「道」

「危險を冒して近道を歩くよりも、少しは遠道をしても、人の行くべき道を歩いた方が危險なことがなくてよいと思ふ。卽ち冒險をやつて一躍大官になつたり、富豪にならうと考へて、實行するよりは、成功の時機がよしや遲れても、人の人たる道を歩一歩と踐みしめて行くことが最も安全であり、堅實な方法である」との御意と拜し奉る。人は兎角横着な弱點を持つてゐて、人が十年かゝるところを五年で成功したい。人が一年を要するところを半歲で成し遂げたいと欲するのが常であるが、世の諺の如く「急がば廻れ」である。却つて焦慮のために不成功の悲哀を嘗めることが往々ある。

十月六日

産みなさぬものなしといふあらがねの
つちはこの世の母にぞありける

明治三十七年御製——「地」

「あらがねの」は土の枕詞。「あらゆる物を産出する地は、この世の母である」との御意と拜する。實に天は父の如く、地は母の如し、動物・植物・鑛物等は地に生ずることを思ふ時、本統に地に對して感謝の心を持たなければならぬ。天と太陽に對して敬虔の心を持つ人は多くあるが、地の恩を思ふ人は少ない。佛敎にあつても、四恩と言つて、天地の恩・國王の恩・父母の恩・衆生の恩を擧げて、地の恩を父母の恩など〻同等なものとしてゐる。これには餘程重大な意義が存するものと思はれるのである。「土に生きよ」「大地に還れ」といふ大地禮讃の思想を唱へる人も決して所以なしとしない。

十月七日

こき薄き色をまじへてもみぢ葉は
そめはてぬ間ぞ盛なりける

明治三十七年御製——「紅葉淺深」

「紅葉が染めつくした時は、やがて散る時であるから、全部紅葉せずに、濃い色と薄い色をまじへた時こそ、紅葉の誠の盛りといふべきである」との御意と拜し奉る。この御製を拜して吾人は「九分は足り十分はこぼると思ふべし」といふ諺を今更に想ひ起すのである。滿開の花を見た時も亦軈て散るべき花であるといふことを聯想し易く、人の慾望も丁度これと同じである。隴を得て猶ほ蜀を望みたがるのは人情の常であるとはいへ、人間の慾望に限りがないといふことを、心に深く〳〵刻み込んで、何事も十分を以てせず、先づ〳〵九分の程度を以て滿足しておくべきである。

十月八日

いにしへの人の功を語りいでぬ
もの靜かなる秋の長夜に

明治三十七年御製——「秋夜閑談」

「秋の夜の閑かなる御物語にも、國家の功臣の上を宣はせ給ふ」との御意と拜し奉る。我等國民も亦閑ある度に先祖代々の話をして、自分の家庭といふことをはつきりと認識し、決して先祖代々の靈を辱しめぬやうに心がけ、或は昔の聖人や賢者と謂はれた人々の話をして、一は各自の修養の資とし、一は一家團欒の基とするといふやうにしたいものである。大學といふ書に「小人閑居すれば不善を爲す」と戒めてゐる如く、兎角人間は暇さへあれば、冗談や戯れに無益の時間を空費し易いものであるから、些かの時間をもこれを利用して、善事を爲すやうに心がけなければならぬ。

十月九日

あきの野のちぐさの花の色々を
聲にうつして蟲ぞなくなる

明治三十七年御製——「蟲聲非一」

「秋の野の草花の種類も千差萬別であるのを、それぞれ蟲に移して、蟲も亦千種に鳴くよ」との御意と拜する。世のさま亦秋の野の如くで、千態萬樣である。卽ち人はその顏を異にするやうに、その心を異にし、又、學者あり、富豪あり、賢人あり、常人ありで、恰も秋の野に咲く千草の如くである。一樣にしようとしてもなか〳〵困難であり、中には全く不可能のものさへある。例へば己の心と人の心とを同一にするといふことは到底不可能なことであらう、又世人の心が皆同一になつたならば、進歩といふこともなくなつてしまふ。故に己の心を以て他を忖度し、他を律せぬやうにしなければならぬ。

十月十日

秋の野のちぐさの花にくらぶれば
染めなす色は限ありけり

明治三十七年御製——「草花」

「ちぐさ」は種々さま〴〵の草。「秋の野に咲くいろ〳〵の草の色に比較するに、人工で染めた色は限りがあつて、矢張り自然の力には及ばぬ」との御意と拜する。自然美!! 噫!!! 何んと神々しくも尊いものであらう。日光廟が如何に華美を極めても、天龍川の幽邃なる自然には遙かに及ばぬであらう。庭園にあつても亦然りである。人工を加へて造つた庭園よりも、自然の背景を以てした庭園が上品にしてまた妙景たることは、誰しも肯けることであらう。人の言動も亦この通りである。殊更につくろふ所謂虛禮よりは、素朴であつても、心の底からの言動が、どんなに麗はしいものであらう。

十月十一日

ゆく人を妨げざらばたちとまり
見てましものを野邊の秋萩

明治三十七年御製——「行路萩」

「まし」は實際にはさうしなかつたことを假想する助動詞である。「路ゆく人の妨げとならぬならば、野邊の秋萩を、立ちとまつて見て行くのであらうものを、人の妨げとなることを恐れて、よく見ないで過ぎて行くのが飽かぬことであることよ」との御意と拜し奉る。行路の秋萩といふ御題詠であるけれども、平素の大御心を伺ひ奉るべき御製である。兎角凡人は他人の迷惑などを顧みず、己さへ見ればよいといふ態度で、物珍らしい時などは大きく立ちふさがつて見がちであるが、己が見たいと同時に、他人も亦見たいといふことを忘れずに、他をも思ひやらなければならぬものである。

十月十二日

月の輪のみさゝぎまうでする袖に
松の古葉もちりかゝりつゝ

明治三十六年御製——「をりにふれて」

「月の輪のみさゝぎ」は孝明天皇、英照皇太后の御陵を申し、京都泉涌寺後山にある。畏くも明治大帝にはこの年の四月から五月にかけて京都御駐輦あり、五月中に孝明天皇の御陵と英照皇太后の御陵とを御參拜あらせられた。松の古葉が御袖に散りかゝるにつけても、そのかみの御思出如何に深くましますことならむと、恐察するだにかしこき極みである。毎朝天照大神を禮拜し、皇室を遙拜し、更に先祖代々の英靈に禮拜すべきは勿論であるが、他國に出てゐて、歸鄉の際などには、歸宅に先だちて、まづ先祖代々の墓に禮拜し、然る後に父母の御機嫌を伺ふやうにしたいものである。

十月十三日

ことしげき世にふる人もわがこのむ
道にかけいるひまはありけり

明治三十六年御製――「をりにふれて」

「ことしげき世にふる人」はいそがはしい世の職業に當つてゐる人」の意。「寸暇のない程繁忙を極めてをる人も、自分の好きな娯樂をする暇はあるものである」との御意と拜する。人情の機微を御詠じ遊ばされた御製である。世の中の人は本統にこの御製の通りである。忙しい忙しいと口癖のやうに言つてゐながら、時にはパチリ〳〵と烏鷺をたゝかはして一日を費やすことは珍しくない。人間が娯樂を求めることは必ずしも惡いことではないが、その選定に充分の注意を拂ひ、苟しくもこれに淫するやうなことがあつてはならぬ。娯樂であるからなどゝ輕んじても、遂にその身を亡ぼす因となることがある。

十月十四日

もろともにたすけかはしてむつびあふ
友ぞ世にたつ力なるべき

明治三十六年御製――「友」

「むつびあふ」は睦しくしあふ義。「艱難困苦に際しては、互に助け合つて、睦しくし合ふ友人こそ、社會に立つ最も大きな力である」との御意と拜する。友誼を重んずべき御主旨の御製である。かうした輕佻浮薄の世の中にあつて、眞の友人を選ぶといふことは、なか〳〵困難である。殊に社會に立つてからの友人は、尙更さうした傾向がある。何故ならば多くの交際が、利害關係を伴つてゐる場合が多いからである。然しながら一旦友人と定めたならば、何處までも扶け合ふ精神がその基調をなさなければならぬ。兄弟も及ばぬ友情の發露こそ、眞に望ましき友人である。

十月十五日

すなほにもおほしたてなむいづれにも
かたぶきやすき庭のわか竹

明治三十六年御製――「子」

「おほしたてなむ」は養ひ育てよと他に望まれる詞。「若い人の心は善い方面にも、また悪い方面にも傾き易いものであるから、すなほに養育せよ」と子供の養育についての御諭しと拝し奉る。子供の心は無垢で、何等の色にも染まつてゐない。それだけ染り易いのである。環境に支配され易いものである。故に養育する親が一朝その方針を誤まつたならば、遂にとりかへしのつかぬ羽目に陥るのである。一度悪い方面に足を入れた子供の心を矯正することは極めて困難なことである。或は不可能に属するかも知れない。だからまだどちらにも染まらぬうちに、善い方向に育てることが肝要である。

十月十六日

老の坂こえぬる子をもをさなしと
思ふやおやのこゝろなるらむ

明治三十六年御製――「親」

「老の坂」とは老年を坂に比していふ。「老の坂をこえて、はや五十にも餘る子を、矢張り幼い自分の子供であると思ふのが親心であらう」との御意と拝する。百歳にもなる人が、八十歳位の老人を、伜がといふことは一寸異様に考へられるが、幾歳になつても、子は子であり、親は親として儼然たる親子の關係に變りはない。そして、その子が八十歳になつても、なほ親としての慈愛の心を以て、その子の身に過ちなかれかし、すくよかなれかしと願ふ親の心こそ、誠に何物にも換へ難い、ありがたい心である。子たる者は常に親のこの深い〳〵慈愛の心を忘れぬやうに心がけなければならぬ。

十月十七日

ひさかたの空吹く風よひとみなの
心のちりを拂ひすてなむ

明治三十六年御製——「寄風述懷」

「ひさかたの」は空の枕詞で、別に意味はない。「すてなむ」は捨てよかしの義。「空吹く風よ、皆人の汚れた心の塵を拂ひ捨てよ」との御意と拜し奉る。このありがたい御製を拜誦して、吾人は自己の心に汚れたところはないかを反省しなければならぬ。神の前に清淨潔白を誓ひ得られるか？　天地に恥ぢる行爲がないか？　些かたりとも他人を害するやうな言動はないか？　汚れがちなる己の心を幾度も〳〵吟味して見る必要がある。人生の目的は他にはない。誠の人間となる。これが人間としての最大の目的であり、窮極の目的である。名聞と物質は決して人生の第一義的なものではない。

十月十八日

波の音きこえぬ山の高嶺より
青海原をひとめにぞみる

明治三十六年御製——「山眺望」

「波の音が聞えぬほど高い山の嶺から、渺茫たる青海原を一目に見おろす」との御意と拜する。高山から大海を見おろした時の氣持、廣大・崇高の心が自ら湧いて來ることを禁じ得ぬであらう。そして宇宙・社會といふことをはつきりと意識するのである。區々たる小我を捨てゝ大我を自覺するのも亦この時である。人は徒らに己あることをのみ考へるべきではない。常に大海を見るが如く廣く社會の大局に目を注ぎ、社會の動き、世界の文運といふことを忘れぬやうにしなければならぬ。井底の蛙の如く大海を知らずしては、人間たるの資格を缺くものと謂はねばならぬ。

十月十九日

うもれ木をみるにつけても思ふかな
しづめるまゝの人もありやと

明治三十六年御製——「埋木」

「うもれ木」は木の幹が、水中又は土中に埋れて、幾多の歳月を經て、化石狀に變じたもので、器物などを造るに尊ばれる。「しづめる」は埋木が水底に沈みをるを、世に顧みられずして沈淪することをかねさせ給ふ。「埋木を見るにつけても、聖代になほ幸なくして沈みをる人がないかを思ふことである」と畏くも御仁德の大御心を注がせ給ふ御製と拜し奉る。吾人國民たる者は、この洪大なる御聖德に感泣しながら、更に自分よりも不幸な者はないであらうかといふことを常に忘れぬやうにし、若しさういふ不幸な人々があつたならば、等しく 陛下の赤子である同胞に、溫き同情を表することを忘れてはならぬ。

十月二十日

あま雲はあらしにはれて山川の
水上たかく見ゆるけさかな

明治三十六年御製——「晴後遠水」

「雨雲を荒い風が吹き拂つてから、今朝は山中を流れる川の上流の水が、高く見わたされる」との御意と拜する。吾人の日常生活に於て、或は友人間に、時には家族の間柄に、又は知人の間に、かうした雨雲にも似た心が生ずることは偶〻あるであらう。恐らく人間である以上かうした現象の生ずることも、或は避け難いことであるかも知れない。然しながら、かうした雨雲にも似たるこだはりの心を、何時までも持續すべきではない。その事情や理由が判明して、對手がうち解けたならば、自分も亦一天雲なく晴れた空のやうに、さわやかな氣持になるこそ、度量の大きい人物と謂ふべきである。

十月二十一日

器にはしたがひながらいはがねも
とほすは水のちからなりけり

明治三十六年御製——「水」

「水はそれを容れる器の形に從つて、方にも圓にもなるものであるが、又一面には岩の根をも掘り穿つ力があるものである」との御意と拜する。水の性質の穩かな方面と、激しい方面とを御詠じ遊ばされて御諭し給ふ御製と拜察するのであるが、如何に水の如く從順なものと雖も、餘りの侮辱、堪へられぬ事を强要されて、一旦反撥した場合には、猛然と起つものであるといふことを吾人は悟らなければならぬ。殊に新國家の國民に對しては、この心がけを忘れてはならぬ。「一寸の蟲にも五分の魂あり」とは俗諺の戒めとするところである。

十月二十二日

あらがねの土の下樋をかよひきて
都にすめる多摩川のみづ

明治三十六年御製——「水」

「あらがねの」は土の枕詞で、製錬しない金屬の義。土とつゞくは、荒金は土中にある故にいふといふ說と、鎚で鍛へる故にいふといふ兩說があるが、今はどちらの說に從つてもよい。「下樋」はこゝは地中に埋めた水の通路のことである。「すめる」は都に棲む意と、水が澄むとをかけさせ給ふ詞である。「土の中を通つて、都に流れ來ても矢張り多摩川の水は澄んでゐる」との御意と拜する。人は都に棲む時は、種々雜多な誘惑が多いだけに兎角濁りに染み易いのが常であるが、而も多摩川の水のやうに、人間は如何なる環境に住むとも、何時までも常に淸淨潔白な生活を續けなければならぬ。

十月二十三日

久方のむなしき空にふく風も
物にふれてぞ聲はたてける

明治三十六年御製――「風」

「久方の」は空の枕詞で、意味はない。「空吹く風そのものには聲がない。風が物に觸れて始めて聲が生ずるのである」との御意と拜する。韓退之の孟東野を送る序に「草木聲無し、風これを撓めて鳴り、水聲無し、風これを蕩げて鳴る」とある。その意相通ふに似たるところがある。人も亦この風や水の如くである。如何に賢人・名將と雖も、時に遭はず、用ゐられる人に會はなければその眞價を表はし得ないものである。孔子も時に遭はずして蜀國を彷徨した事もある。諸葛明も時に合はずして、南隴の茅屋に陋居してゐたが、一度劉備に用ゐられて、始めてその才能を遺憾なく表はし得たのである。

十月二十四日

ともしびをかゝげぬ方に來てみれば
いよ〳〵あかし秋の夜の月

明治三十六年御製――「秋月明」

「あかし」は明るいの意。「ともしびをかゝげぬ方卽ち暗い方に來て見れば、秋の月がいよ〳〵明るい」との御意と拜する。この御製を拜誦して「國亂れて忠臣あらはれ、家貧しうして孝子出づ」といふ句を思ひ起すのである。國の亂れや貧苦は、恰も暗い方面とも考へられ、國治まり、一家齊ふことは明晃々たる秋の月明にも似たるものである。吾等國民は日夜孜々として努め勵げみ、修養を怠ることなく、家富み榮えて、ます〳〵その人格を輝かし、互に一致協力して國家の隆昌に貢獻するやう心がけなければならぬ。かくしてこそ始めて一國民としての義務を完うし得たものと謂ふべきである。

十月二十五日

大井川さくらの紅葉ちりうきて
ゐせきの波に秋風ぞ吹く

明治三十六年御製——「川秋風」

「大井川」は京都の西、丹波から出でゝ嵐山の麓を流れる川。「ゐせき」は水をせきとめてよどみを作つたところをいふ。「大井川に櫻の葉の紅葉したのが散り布いて、淀に秋風が吹いて波が立つてゐる」との御意と拜し奉る。晩秋のさまひしゝと身に迫るを禁じ得ない。晩秋こそは人生の晩年にも比すべきものである。若しや青年時代に勤め愼んで、誠の生活を踐まなかつたならば、この櫻の紅葉の如く、流轉の波に揉まれて、落ちつく時がなく、人生の哀れを止めるに至るであらう。一日も油斷の心あつてはならぬ。怠慢・放縱は日一日とその身を流轉の世界に沈めつゝあることに心づかねばならぬ。

十月二十六日

やどるべき木立多かる森にても
ねぐら爭ふむら烏かな

明治三十五年御製——「鴉」

「むら烏」は群鴉の意。「宿るべき木が澤山ある森でも、烏は塒を爭つてゐる」とは文字上の御意で、爭はずにも濟む場合でも、つまらぬ事を心にかまへて爭ふことを誡め給ふ大御心と拜察せられる。吾等國民は皆等しく　陛下の赤子であり同胞であるのに、何故にかくまで爭ひの多い世の中であらうか？　塒を爭ふ烏のやうな生活は、少なくとも萬物の靈長たる人間のなすべきことではない筈である。我執に囚はれ、物慾の奴となつて互に鬪爭を敢てする人間こそ、眞に動物にも劣るべき人間と謂はなければならぬ。況んや肉親の間に於て角つきあふに於ておや、言語道斷である。

十月二十七日

のる人の心をはやくしる駒は
ものいふよりもちはれなりけり

明治三十五年御製――「馬」

「あはれ」は愛らしい。いとしいなどの意味であつて、可愛さうであるといふ意味ではない。「乗る人の心を早く知る馬は、ものいふよりもいとしいものである」と、愛憐の大御心、乗御の馬匹に及ぼさせ給ふ御製と拝する。人間の慈悲や愛といふことが、誠の心から發するものであれば、禽獣と雖も必ずこれを悟つて人に馴れ近づくものである。獰猛なる獣王ライオンも、その御する人の意のまゝに動く。それは御者の心からなる愛に感ずるからである。況してや人と人との間に於ておや。愛の心に満ちてゐたならば、爭ひなどの起らう筈が断じてあり得ないのである。貴きものは博愛の心である。

十月二十八日

遠くとも渡りてゆかむわが爲に
かけたりときく野路の川橋

明治三十五年御製――「羇中橋」

「行幸に際して、地方の人民が熱誠もてかけたと聞し召された橋を、よし遠くとも殊更に渡り行かう」と宣へる大御心の畏さよ。多くの人を使用する資本家達も、この　明治大帝の大御心を奉戴したならば、勞働爭議などといふ忌はしい鬪爭も、その影を没するに至るであらう。現在の資本家はもう少し勞働者に對して同情と思ひやりが必要ではないか。資本家のために働いて呉れるのであるといふことを考へてこれを遇するならば、その精神が勞働者に通じない筈はない。こゝに於てか、勞働者も亦資本家の心情に感じ、骨を惜まず働き、そこに美しい勞資協調の花が咲き誇ることであらう。

十月二十九日

位ある身をわすれてや池のおもの
　　鷺はあしまの魚ねらふらむ

明治三十二年御製——「池邊鷺」

「位ある身をわすれて云々」は五位鷺の故事。卽ち近衞天皇が神泉苑に宴を催させ給うた時、鷺に五位を授け給ふ。故に五位鷺といふ。「五位鷺は己の位ある身分を忘れて、葦間に戯れる魚を捕へようとしてねらつてゐる」との御意と拜する。訓誡の御寓意ありげなる御製である。吾人はこの御製を拜誦して、如何なることを悟らねばならぬか？　自己の地位を利用して利權を漁ることは、屢〻日常の新聞に見るところであるが、丁度五位鷺が魚をねらふさまに似てゐるではないか。世の所謂疑獄と稱する忌はしい事柄は、この五位鷺の心持から發するものであることを悟つて、大いに戒愼しなければならぬ。

十月三十日

をしへある庭にさきたる撫子の
　　花は露にもみだれざりけり

明治三十三年御製——「瞿麥露」

「をしへある庭」とは家庭の教訓の義、論語の季子の篇に、孔子の子鯉が趨つて庭を過ぎた時に、呼び止めて、詩と禮とを學ぶべきことを訓へられたといふ故事から、庭訓といふ語が出たのである。それを譯して「をしへの庭」といふのである。「撫子」は愛兒にたとへさせ給ふ。「庭に咲いた撫子の花は露にも亂れることなく咲き誇つてゐる」とは文字上に表はれた御意で、「家庭教育の行き屆けた家庭に育つた愛兒は、社會に出ても決してその行ひを亂すやうなことはなく、麗はしい人材の香りを放つものである」との御意と拜し奉る。忽せにすべからざるは愛兒の家庭教育である。

十月三十一日

九重のまがきのうちにさく菊も
風のまに〳〵世にかをるらむ

明治三十二年御製——「菊薫風」

「九重」は宮城をいふ。「まがき」は竹・柴などで粗く組んだ垣をいふ。「宮城のまがきのうちに咲く菊が、風のまに〳〵匂ひいで、世に馨るであらう」との御意と拝する。吾等國民はこの御製を拝誦して、皇恩の厚きに感泣すると共に、大いに己が身を戒慎しなければならぬ。それは自己の言行を誇ることである。人は兎角僅かの美事をなして、これを誇り顔にしたがる。己の徳行や善事は、宣傳しなくとも、九重のまがきに薫る菊のやうに、自然に廣がるものであるから、美徳を積めば積むほど、ます〳〵慎んで、宣傳・誇張することなどは最も戒めなければならぬ。

十一月一日

子わかれの松のしづくに袖ぬれて
昔をしのぶさくらゐの里

明治三十一年御製——「櫻井里」

「さくらゐの里」は攝津の國山崎の南にあつて、楠木正成が足利尊氏の軍を邀へ討たむとして、その子正行と袂別したところである。櫻井里の子わかれの松を御覽遊ばされて、楠氏父子の誠忠を御思召され給ふ御製である。後醍醐天皇の延元元年、賊將足利尊氏は征討將軍新田義貞の官軍を破つて西上し、將に帝都も危險に瀕した際、楠木正成は奇謀を以て尊氏を西走せしめたが、再び尊氏は大軍を擁して東上した。時に正成は戰利あらざることを自覺し、行く〳〵櫻井の驛に參つた時に、當時十一歳であつた正行を呼び、父なき後は父の志を繼いで賊を滅ぼすべきことを訓へて正行を家に還さしめたのであつた。

十一月二日

をちこちの野山のむしもはなたれて
鳴くねくらぶる園の内かな

明治三十一年御製——「蟲聲非一」

「をちこち」は彼方此方の意。「彼方此方にすむ蟲を宮庭の園に放つたところが、いろ〳〵な蟲の鳴音を較べるやうに鳴いてゐる」との御意と拜し奉る。人の意見も亦この蟲の聲の如くである。必ずや一樣ではない。そこに又進歩もあり、發達もあるものである。若し一樣であつたならば世の中の進歩といふことがなくなるであらう。故に社會の凡ての人の意見を己と同一意見にするといふことは不可能なことであることを思はなければならぬ。教育に於て殊にこの必要がある。教師と全く同じ意見の兒童ばかりであるならば、教師より優れた人物が世に出ないことになるのである。

十一月三日

あまたたびしぐれて染めしもみぢ葉を
たゞひと風のちらしけるかな

明治三十年御製——「落葉風」

「しぐれ」とは秋の末から冬にかけて降る雨をいふ。時雨によつて紅葉するといふことは、古歌に多い。「時雨がかさね〳〵降つて色づいた紅葉も、たゞひとたびの風に散つてしまつた」との御意と拜し奉る。人生の行蹟また斯くの如くである。往年の奮鬪努力の結晶も、去る大正十二年九月一日の大震災の如きに遭遇しては、たゞ一瞬にして灰燼に歸することが、決して珍しいことではない。惜んでも尙ほ餘りある事ではあるが、人事は天災地變に抗すべくもない。徒らに天を恨んだところで詮ないことである。自ら自暴自棄の心を戒めて雄々しくも再生の計を樹てるべきである。

十一月四日

わたつみのほかまでにほへ國の風
ふきそふ秋のしらぎくの花

明治二十九年御製――「寄菊祝」

「わたつみ」は海神の義から轉じて、一般にたゞ海をいふ。ここは外國のこと。「國の風云々」の加はれることを、秋の白菊の花によせて宣ふ。「海外までもわが國威を匂ひ輝かせ秋の白菊よ」と御仰せ給ふ。内は富國强兵をはかり、外は國威を宣揚するこそ、大日本帝國の臣民たる者の義務であることを、一日も忘れてはならぬ。これを實現するためには、各〻その業務に精勵して撓むことなく、國民は一致協力して互に謙讓の美德を發揮して心の融和を謀り、冗費を省いて儉素を旨とし、只管に誠の道を踐めば、國内の充實は自ら完成し、國威從つて海外に宣揚されることになるのである。

十一月五日

心にもかゝる雲なきこの秋の
もなかの月のかげのさやけき

明治二十九年御製――「中秋月」

「秋のもなかの月」とは卽ち八月十五夜の月である。「心に一點のわだかまりもなく、空には又一點の雲もなく、中秋の月を見ることの、何んとはれ〴〵とした心であらう」との御意と拜察し奉る。明治二十七八年の戰役も終つて、極めて平和な秋であるところから、かゝる雲なしと宣へしことゝ恐察し奉るのであるが、下國民も常に中秋の月のやうに、心に一點の曇りもなく、朗かな心持でその日〴〵を送らなければならぬ。陰慘な心を以て暮すことは、人間の一大不幸である。英雄・偉人の心境を見よ。常に明朗そのものゝ態度を持してゐるではないか。

十一月六日

むら雲を嶺のあらしにはらはせて
さしのぼる月の影のさやけさ

明治二十五年御製——「月前風」

「山のはにかゝる叢雲を、嶺の嵐に吹きはらはせて、昇つた月の影の何とさやけくあることよ」との御意と拜する。人も亦この月の如く、寄せ來る艱難と闘ひ、忍び寄る誘惑を拂ひのけて、成功の峯に譽を輝かした時は、果してどんなにか喜ばしいことであらう。苦闘の中にゐる間は、稍苦しいやうな氣持がするものであるが、人は決して苦しいと思つてはならぬ。艱難は己を神が試みる一方法であると考へて、甘んじてこれを受け、喜んでそれを踏み越えて行くやうにしたならば、遂にはその努力忍耐が酬いられて、その希望を達することが出來、立派なる人間となるのである。

十一月七日

ひとしきりさそひし風はしづまりて
おのがまに〳〵ちる紅葉かな

明治十八年御製——「風後落葉」

「樹々の葉が、冬になつたので、その枝に堪へられずして、誘ふ風も靜まつたにも拘らず、己が思ふまゝに散り果てる」との御意と拜し奉る。一葉落ちて天下の秋を知る。秋こそ物の哀れを思はしめる季節である。ハラリ〳〵と落ちる木の葉は、人に諸行無常を囁くやうである。如何に健康を誇る人も、何時無常の風が吹き來らぬとも限らぬ。故に人は常に何時死に遭遇するとも差支のないやうに、日頃からの用意が必要である。昔は武士が戰場に赴く場合に、鎧に香をたきこめる風習があつた。今の人は常に人格の向上と儉素の心とを失はぬやうにしなければならぬ。

十一月八日

風ふけばおつるこのはに朝な〳〵
はらふ庭ともみえぬころかな

明治十七年御製――「庭落葉」

「はらふ」は掃除すること。「風ふけば木の葉が落ちて、毎朝々々掃除する庭とも見えぬ初冬の頃である」との御意と拜する。げに初冬の落葉は、掃つても〳〵掃ひ切れない。人の心の修養も亦その通りである。磨いても〳〵なほこれでよいといふことはない。心の塵は次から〳〵とふりかゝるものである。今日より明日、明日よりは明後日と、ます〳〵綺麗に心の塵を拂ふやうにしたならば、遂には心の塵も少なくなつて、拂ひ清められた心となるのであらう。嗚呼拂へども〳〵尙ほ落ち來る心の塵の煩はしさよ。心に一の塵なき境遇となつたならば、人の望みは達し得られたのである。

十一月九日

信濃なる河中島のあさ霧に
昔の秋のおもかげぞたつ

明治十七年御製――「河上霧」

「河中島」は千曲川と犀川との合流する地で、戰國の昔、上杉謙信と武田信玄の二梟雄が爭つた古戰場である。「おもかげぞたつ」とは、その物ではないが、その如く見える。卽ち「昔の戰ひのありさまが、髣髴として見えるやうな心地がする」との御意である。「信濃の川中島の朝霧を見るに、昔上杉謙信と武田信玄とが戰つたさまが髣髴として見えるやうである」との御意と拜する。吾々も亦昔の英雄や豪傑が殘された跡をたづねて、大いに學ぶところがなければならぬ。昔の英雄・豪傑は、時代こそ異にするけれども、人間の道に決して二つはない筈である。歷史は吾人に最もよき敎訓を示すであらう。

十一月十日

人もわれも道を守りてかはらずば
この敷島の國はうごかじ

明治十一年御製——「國」

「道」とは人の道であつて、教育勅語に仰せ給ふ孝行・兄弟・夫婦・朋友・恭儉・博愛・修學・習業・知能啓發・德器成就・公益・世務・國憲・國法・義勇奉公・皇運扶翼などをいふのである。「敷島」は大和國の地名に磯城島といつて都になつた處がある。それからしきしまの大和の國といひ、轉じて敷島とのみいつて、日本國をさすことゝなつた。こゝに敷島の國と宣へるは、卽ち日本帝國の義である。「君臣共に道を守つて變らなければ、我が大日本帝國の動くことはないであらう」との御意と拜し奉る。吾等國民たるものはこの　明治大帝の大御心を奉戴して皇國日本の國基を萬代不易たらしめねばならぬ。

十一月十一日

豐浦がた千船もゝふねいりみだれ
波にしづみし昔をぞ思ふ

明治九年御製——「壇浦懷古」

「豐浦」は下の關海峽東口の北岸をいふ。「がた」は海といふに同じである。元曆元年三月（今から約八百五十年前）この地に於て平氏の一門、源氏のためにうち滅ぼされ、海の藻屑と消え失せた所である。「千船もゝふね」とは多くの船のこと。「この豐浦の海で、源平の船が入り亂れて戰つた結果、平氏の一門が波に沈んだ元曆の昔が思ひ出でられる」との御意と拜する。源氏を滅ぼして、「平氏に非らざれば人に非ず」とまで權勢を擅にした平氏も、僅か三代を經ずして壇之浦の藻屑と消えたのであるが、專横を事とするものゝ末路、實に憐むべきものである。

十一月十二日

なすことのなくて終らば世に長き
よはひをたもつかひやなからむ

明治四十五年御製――「をりにふれて」

「何んの爲すところもなく、たゞに生活してゆくといふのであれば、この世に長い壽命を保つ甲斐がないであらう」との御意と拜する。この御製の如く、人間はたゞに生活して行くといふだけでは、誠の人間とは謂はれない。君のため、國のために盡してこそ、人生の意義が全うされるのである。何の目的を以て人間は生れて來たかといふならば、誠の人間となるべく生れて來たのである。然らば誠の人間とは何か。人の人たる道を踐み行ふのが誠の人間である。昔孔子も「腹一杯に食し、暖かく衣服を着て、何等爲すところのない人は、動物にも劣るものである」と謂つてゐる。

十一月十三日

くにを思ふ臣のまことは言のはの
うへにあふれてきこえけるかな

明治四十五年御製――「をりにふれて」

「眞に國家を憂へる臣下の誠は、その言葉の上にあふれて聞えるものである」との御意と拜する。明治大帝の英明にわたらせらるゝほどこそ、たゞ〳〵恐懼の外はない。人の言葉を聞く時は、果して誠意を以ていふのであるか、或は深切ごかしに云ふのであるかは、自らその言葉にあらはれるものである。それをはつきりと知ることが肝要であるが、世の中の多くの人々は、それを判別する能力に缺ける嫌ひがある。深切ごかしにいふ言葉が耳に入り易く、誠を以てする直言が、却つてその人の心を害する場合が多いのであるが、賢明なる人のとらぬところである。

十一月十四日

心からそこなふことのなくもがな
親のかたみと思ふべき身を

明治四十五年御製――「身」

「なくもがな」はないやうにありたいの意。「自分の心からして、親の遺物とも思ふべき身を毀傷しないやうにありたいものである」との御誡めと拜する。孝經にも「身體髮膚之れを父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始めなり」とある。心からでなくて害ふ場合がある。卽ち國のために戰爭に出た場合とか、親や人を助けるために過つて負傷する場合などは自ら別であるが、他人との爭ひや、娛樂などのために、可惜身體に傷をつけるやうなことがあつては、折角完全な身體を授けて呉れた親に對して申譯がない。卽ちこれが不孝の第一歩であることを考へて、身體を大切にしなければならない。

十一月十五日

思はざることのおこりて世の中は
心のやすむ時なかりけり

明治四十五年御製――「きりにふれて」

「豫期しない意外のことが起つて、御心を安め給ふ時がない」との御意と拜し奉る。一天萬乘の大君にしてかくまで軫念あらせらるとは、たゞ〳〵恐懼の至りである。人生の行路も亦平坦ならずである。一難去つてまた一難來るのが常である。此方の事を解決すれば、又他方から問題が持ちあがつて來る。世の中はなか〳〵これで安心だといふことはない。然しながら、かうして次から次と起つて來る事柄に對しては正しき理智と信念とを以て、過のないやうに解決すべきであつて、苟しくも己が慾望のみに囚はれたり、他に迷惑をかけるやうなことを嚴に愼まなければならぬ。

十一月十六日

あやまたむこともこそあれ世の中は
あまりにものを思ひすぐさば

明治四十五年御製——「をりにふれて」

「あまりに思慮をめぐらして、却つてあやまつことがあるものであるから、注意しなければならぬ」と御戒め給ふ御製と拝する。論語に「季文子三たび思ひて後に行ふ。孔子これを聞きて曰く、ふたゝびせばこれ可なりと」とある。合せ考ふ可きことである。思ひめぐらす、思慮するといふことは極めて善いことであつて、如何なることでも、必ずや一度はよく思慮してなすべく、又言ふべきである。軽率に無思慮の間に言つたり、爲したりすべきではないが、又、餘りに考へすぎて、却つて失敗を招く場合が決して尠なくない。故に思慮も孔子の言はれるやうに二度がよいところであらう。

十一月十七日

いとまなき世にはたつともたらちねの
親につかふる道な忘れそ

明治四十五年御製——「孝」

「たらちねの」は親の枕詞。「道な忘れそ」の「な」に禁止の意味があり、「そ」は念をおす助辭である。「どんな忙しい社會に活動する身であつても、親に仕へる孝道だけは忘れぬやうにせよ」との御諭しと拝し奉る。昔から孝は百行の本といふ。若し人にして孝道を果すことが出來ないやうでは、如何に多忙な事に從事するとも少しの價値がないものである。鳥や鳩のやうなものでも、反哺とか三枝の行爲があると言はれてゐるのである。況んや萬物の靈長などゝ豪語する人間が、孝道を守ることが出來ないやうでは、禽獣にも劣るものと謂はなければならぬ。

十一月十八日

いかならむことある時もうつせみの
人の心よゆたかならなむ

明治四十五年御製——「心」

「うつせみの」は枕詞。「ゆたかならなむ」は「ゆたかにあれよかし」の意。「苦難を嘗めてゐる場合でも、失意のどん底に沈んでゐる時でも、どんなことがある場合でも、心だけはゆたかにあれよと」との御誡めと拜し奉る。貧苦に惱んでゐる時は、徒らに富豪を羨んで見たり、失業してゐる場合は資本家を恨んで見たり、甚しきに至つては、社會を呪ふ者さへあるが、不心得の甚しい者と謂はなければならぬ。何も天を恨み、人を羨む必要はない。只管自己の力の及ばざることを自覺して、奮鬪努力の精神を鼓舞して、嬾て來るべき幸福を攫むことを思へば、心自ら朗かになるものである。

十一月十九日

とつくにの人に見すべきしきしまの
大和錦をおりいださなむ

明治四十五年御製——「錦」

「しきしまの」はもと奈良朝に都となつた大和の一地名であつたが、後に大和の異稱となり、また枕詞となつた。「大和錦」は國產の錦の織物である。この御歌は、織物にことよせて、「外國に誇るべきわが國の文物を盛んならしめよ」との大御心の御發露と拜する。德川時代に於ける鎖國主義は、我が國の文化を遲らしめた。然るに明治維新となつて外國との交通開けると同時に、西洋文化の輸入となり、我が國の文化は急速度の發達を遂げたのであるが、明治四十五年頃には、尙ほ外國の文化に劣るところあつたのである。然し昭和の今日は、外國の文化を凌駕するほどの進歩を見るに至つた。

十一月二十日

絲竹のしらべたへなる聲にこそ
人の心もやはらぎにけれ

明治四十五年御製――「管絃」

「絲竹のしらべ」は音樂のことで、絲は絃ある樂器、竹は笛の類をいふ。「たへなる」は微妙なの義。「音樂の微妙な音を聞いた時こそ、人の心がやはらぐものである」との御意と拜する。孔子も亦人の心をなごやかならしめるものは音樂であつて、國を治めるには音樂の必要なることを力說してゐる。音樂は有閑階級の娛樂であるかのやうに思はれるが、決してさうではない。心の荒んだ時、微妙な音樂を聞くならば、荒んだ心持もやはらぎ、淸淨な心となる。然しこの場合に注意すべきは淫樂であつてはならぬ。淫樂は却つて人の心を墮落せしめるものであることを忘れぬやうにしなければならぬ。

十一月二十一日

村鳥のねぐらあらそふ夕暮は
林のかげもさわがしきかな

明治四十五年御製――「林鳥」

「村鳥」は群鳥の意、卽ち群り集まる鳥のこと。「ねぐらあらそふ」は塒に就かんとして爭ひ騷ぐ。「林のかげも」の上に、晝のほどは靜であつたのにの意味を補つて見ると、その御意がなほ判然と了解されるであらう。「夕暮に多くの鳥が集まつて、塒を爭つて、晝のほどは靜かであつた林のかげも、まことに騷々しいことである」との御意と拜する。人間も丁度この鳥が塒を爭ふやうなことがないであらうか。互に己の身を顧みたいものである。僅かの利益を中心として、醜い動物の本能を發揮することは、餓鬼道に墮ちた鬼畜のやうで、誠にあさましい限りである。

十一月二十二日

まつりごとよこしまならぬ國にこそ
さかしき人も多くいでけれ

明治四十五年御製——「國」

「まつりごと」は政治。「さかしき人」は賢人をいふ。「政治がよこしまならぬ國卽ち正しくあかるい政治が行はれる國にこそ、賢人も多く出るのである。換言すれば、正しい政治が行はれない國には賢人も出ない」との御意と拜する。亂世に於ける賢人は、己の意見が用ゐられないのを知つて、多くは山に隱棲するのが常である。一たび善政が布かれ、賢人・聖者の意見が用ゐられる世の中になれば、今まで隱遁してゐた賢人達が、世に出て來ることは歷史の物語るところである。個人にあつても亦この通りである。一會社などに正しく明るい經營法が行はれなければ、才能手腕ある人は決して集まらないものである。

十一月二十三日

かりそめの事に心をうごかすな
家の柱とたてらるゝ身は

明治四十五年御製——「柱」

「かりそめの事」は一寸したつまらぬことの意。「一家の柱」とはその家を支持する家長のこと。「一家を支持する家長たるべき人は、一寸したつまらぬ事に心を動かしてはならぬ」との御誡めと拜する。一家の家長たるべき人は、その家族を扶養すべき重大な責任を負つてゐるといふことを忘れてはならぬ。一家の家長は船でいへば船頭のやうなものである。その船頭がぐらついたならば、船が進路を失つて、大海に漂ふに至るであらう。後の妻子眷族は、どうして生活して行くのであるか。この點をよく考へて、一家の家長たるべき人は、決して輕々しい行動をせぬやうにしなければならぬ。

十一月二十四日

人の世のたゞしき道をひらかなむ
虎のすむてふ野べのはてまで

明治四十五年御製――「道」

「人の世のたゞしき道」は人道の正義をいふ。「虎のすむてふ野邊」はまだ開けぬ國の意で、如何なる僻陬までものこと。「野邊」といふも、「道をひらく」いへる緣語である。「如何なる僻陬の地までも人道の正しい道を開き行けよ」との御意。大日本國民たる者は、この明治大帝の叡慮を奉戴して、努不正の行爲あつてはならぬ。己にやましい心を持たず、俯仰天地に恥ぢざる言動こそ、正しい道である。これを實踐窮行するには、毎日教育勅語を捧讀して、これをその身に實行することが何よりも捷徑であり、實行し易い方法である。早速今日からこれを實行するやうにしたいものである。

十一月二十五日

ともすればさまたげられて一筋に
ゆかれぬものは道にぞありける

明治四十五年御製――「道」

「ともすれば」はやゝもすれば。「道」とは人の踐み行ふべき道のこと。「やゝもすれば、いろ〳〵な障害に遭つて、一筋に踐み行かれぬものは人の道である」との御意と拜し奉る。社會の文化が進むに從つて、いろ〳〵な誘惑も殖えて來る。人間の本能を刺戟するやうな機會が多くなつて來るために、餘程堅い決心をしてゐても、動もすると、誘惑や本能に負かされて、遂ひ邪道に踏み迷ふことが稀ではない。ここに於てか堅忍不拔なる克己心が必要となるのである。凡ゆる惡と戰つてこれをうち負かして、自己の目ざす一筋を驀進するやうにしなければならない。

十一月二十六日

すゝむにはよし早くともあやふしと
思ふ道には入らずもあらなむ

明治四十五年御製――「道」

「あらなむ」は他に對してかくあれよと希望する意を表はす詞である。「道」といふは單に道路の意味のみではない。人の踐み行ふべき道をも意味する。「成功するには早いと思つても、危險な道に入らぬやうにせよ」との御諭しと拜する。決して成功は急ぐ勿れ。努力の結果は自づと成功の山へ到達するのである。莊子は云ふ「才能ある者は才能のために己れの身を亡ぼす」と。蓋し玩味すべき言葉である。人の鈍才を嗤つて、己が才能を恃み、人が五十歩する間に己百歩せんとして、却つて己の才能に禍ひされて、とんだ大失敗を招ぐことは、世間決して珍しい例ではない。

十一月二十七日

いそのかみ古きてぶりをのこさなむ
改めぬべきこと多くとも

明治四十四年御製――「をりにふれて」

「いそのかみ」は古きの枕詞。「てぶり」は風俗・風習・ならはし」などのこと。「のこさなむ」はのこしたいものであるとの希望を表はす。「世の文運の進歩發達に伴れて、いろ〳〵と改善すべき事柄を生じて來るわけであるが、我が國古來の美風たるべきならはしだけは保存しておきたいものである」との御意と拜する。忠君愛國・祖先崇拜・家族主義、夫唱婦隨などは、我が國古來の美風とも謂ふべきものである。如何に外來思想が侵入して多少は道德に改善すべき點があるにしても、我が國の古來の美風良俗はどこまでも保存して、ます〳〵これを發揮するのが國民たるべき者の義務である。

十一月二十八日

教草しげりゆく世にたれしかも
あらぬ心の種をまきけむ

明治四十四年御製――「をりにふれて」

「教草」は教育の義。「草」といふところから「しげり」といひ、「種をまく」といふ縁語を用ゐさせ給ふ。「誰しかも」の「し」は意味を強める助辭である。「かも」は疑問と感激との意味を兼ねる助辭。「あらぬ心」とは道にかなはぬ心をいふ。「教育が日に増し發達して、人の踐み行ふべき道も確立してゐる世に、(それに反してまだ〳〵人の道をわきまへぬ者があるが)誰がさうしたあらぬ心の種をまいたのであらう」との御意と拜する。げに惡事は父母・長者はこれを教へず、學校に於ては善人たれと教へるけれども、社會に惡事をなす人の絶えぬのは、そも何に原因し、何に影響されるであらうか?

十一月二十九日

まごころをこめてならひし業のみは
年を經れどもわすれざりけり

明治四十四年御製――「をりにふれて」

「精神をこめて習つたわざは、幾年たつても忘れぬものである」との御述懷と拜する。少年時代の記憶は必ずしも記憶力の旺盛なためばかりではない。少年時代の心は他を思ふことが少ない。卽ち一筋にその物事に集注する傾向あるに反して、稍〻青年期に達すれば、心が種々なる方面に走りがちであるために、精神を一點に集注することが困難である。更に成年期に至つては、社會の種々なる關係や交渉のために、一層精神統一が困難となるのである。この事情をよく諒解して、一技一能に秀でるには、他の凡てを打ち忘れて、志す一事に精神を傾倒することが肝要である。

十一月三十日

千早ぶるかみの力によりてこそ
われをたすくる人もいでけれ

明治四十四年御製——「神祇」

「千早ぶる」は神の枕詞。枕詞といふものは歌調を整へるもので、別に意味がない。而して多くは五音の形をとるものであつて、歌によく用ゐられる。「我を助ける人、卽ち賢臣どもが出て來るのは、神の御力によるものである」との御意と拜する。天佑神助といふことは東郷大將も堅く信じてゐたといふことである。國家としても、個人としても至誠によつて磨き出された正義の光は、必ず神界の明鏡に映し、その反射が天佑となり、神助となつて人界に下るといふのが、東郷司令官の信仰基調であると小笠原中將が云つて居られる。大いに玩味すべきことである。

十二月一日

世の中の風にこゝろをさわがすな
まなびの窓にこもるわらはべ

明治三十八年御製——「學生」

「世の中の風」とは世の風潮の義。「まなびの窓」は學窓・學校の意。「學窓にある學生は、徒らに世の風潮に心を騷がしてはならぬ。一意專心學事に勤むべきである」と學生を誡め給へる御製と拜する。學生は今や正に修業の時である。世の中にどういふ問題が起らうとも、決してそれ等に心を向けるべき時ではない。況んや喫茶店やダンスホールなどに足を踏み入れることは、學生たるの本分に叛くものである。學生は學校に通つて勉强するのが本分で、これに全幅の努力と趣味とを持たなければならない。軈て學窓を出て來るのを、社會は兩手を差し伸べて待つてゐることであらう。

十二月二日

思ふこと貫かむ世をまつほどの
月日は長きものにぞありける

明治三十七年御製——「折にふれて」

「思ふことを貫徹しようと思つて、その貫徹されるまでの月日は實に長く感ぜられる」との御意と拜する。國家の大政に對して、如何に遠大の志を抱かせ給ひしかを察し奉られる。少年時代に早く社會に立つて活動したいものであると願つてゐる間の年月といふものは非常に長く感じられる。これは年期奉公の身にある人も、學校生活をしてゐる學生も、大事業を計畫中の人も、皆等しい感じを持つことであらうと思はれる。されども焦慮は失敗の一大原因である。何事も時機到來すれば、自然に解決されるものであるから、人は靜かに努力を繼けるのが第一である。

十二月三日

まつりごとたゞしき國といはれなむ
ものゝつかさよちから盡して

明治三十七年御製——「述懷」

「もゝのつかさ」とは百官のこと。「百官達よ、各〻努力して政治の正しい國と云はれるやうにせよ」と奬勵し給へる御歌である。我〻國民も亦各自努力して正しき人よと云はれるやうにならば、政治の正しい國と云はれるために、大なる寄與をすることになるのである。正しき人と一言にして云へば、極めて容易であるが、あの人は正しい人であると他人から云はれるまでには、決して容易な業ではない。惡事はひろまり易いが、善事はなか〳〵表はれ難い。常なみの行ひをして居つたのでは人から正しい人とは云はれない。人は正しき人よと仰がれるやうに誠の道を踏まなければならない。

十二月四日

まつりごといよ〳〵しげくなりにけり
年の終の近づきしより

明治三十七年御製——「年欲暮」

「まつりごと」は政治。「しげくなる」は繁忙を極める。「年の終」は歳暮である。「年の暮が近いて來たので、忙しい御政務が一層その繁忙の度を增すことである」と、戰時の歳晚に、政務いよ〳〵御多端なるを詠ませ給へる御歌である。歳の暮はその一年の自己を顧みる時である。自分の業績はどうであつたか、行爲がどうであつたかといふやうな、過去一年間の總決算をなすべき時である。而して若し自己の努力の足らなかつたり、誤れる行爲などがあつた場合には、直ちにこれを改めて、來るべき新年には、更に一層の努力と、好成績とを擧げて、國のために盡すべき覺悟をする時である。

十二月五日

つくろはむことまだしらぬうなゐ子の
もとの心のうせずもあらなむ

明治三十九年御製——「心」

「うなゐ子」は幼兒をいふ。「まだとりつくろふことを知らない幼兒の心が、何時までも失せずにあれよ」と、幼兒の虛飾なき心を愛し給ふ御製である。愼むべきは虛飾にこそ。虛飾の醜さは、黑人に白粉をつけたよりもなほ醜いものである。殊に虛飾は男子よりも、婦人に比較的多い。自己の虛しきを飾ることは寔に哀れむべき心情で、唾棄すべきことであるけれども、今なほ多くこの虛飾が行はれてゐるのである。人は花の天眞爛漫と咲き誇つてゐるのを賞する心を持ちながら、己の心を天眞爛漫に持つことを考へぬ。虛飾を尊ぶ人は、內に正しからぬ心を藏する人である。

十二月六日

したさゆる冬のよどこにねざめして
衾かさねぬ人をこそおもへ

明治十九年御製——「冬夜寒」

「したさゆる」は底冷えすること。「底冷えの夜床に寐ね給うて、衾を重ねて着ることも出來ない、貧しい民を思ひやらせ給ふ」御仁慈の御發露がこの御製となつたものと拜察される。かの醍醐天皇が寒夜に御衣を脱して、民の患苦を思ひやり給へる故事や、また後鳥羽天皇の「夜を寒みねやの衾のさゆるにもわらやの風をおもひこそやれ」の御製など〻思ひあはせて、いとも畏き極みと拜し奉る。吾々の同胞が、同じ日本の國土に生れながら、貧苦や病苦に惱みつ〻ある憐れな人々も決して尠なくないのであるから、我々は自己の財力の許す限り、力の及ぶ限り、これ等不幸の人々を救つてやらなければならない。

十二月七日

敷島のやまと心をみがけ人
いま世の中に事はなくとも

明治四十五年御製——「をりにふれて」

「敷島の」はやまとの枕詞である。「大和心」は一に日本魂ともいひ、日本人として保有すべき、雄々しくも立派な心をいふ。「いま」は現時に於ての義。「現時に於ては無事泰平であるが、何時如何なる事件が突發せぬとも限らぬのであるから、人は常に、日本人として保有すべき雄々しくも立派な心をみがいておかなければならぬ」と御誡め給ふ御製である。人生の前途は、人の力を以ては計り知られぬものである。俗諺の如く全く「一寸先は闇」の世の中である。過ぐる大正十二年九月一日の關東大震災を、その一時間前に知つた人はあるであらうか。人は常に有事の際の備へこそ肝要である。

十二月八日

よむふみのうへに涙をおとしけり
昔の御代のあとをしのびて

明治四十四年御製——「披書知昔」

「昔の御代」とは平らかでなかつた昔の御代のこと。「昔の平らかでない御代のさまを讀んで、思はず書物の上に涙を落したことである」と、史書を繙きて、世も平らかでなかつた、昔のあとを偲ばせ給うた折の御心を詠ませ給へる御製と拜し奉る。かの戰國時代には、群雄諸所に割據して、戰爭の絶える時とてはなかつたために、時の皇室の衰微せさせ給ふ御有樣を讀んでは、國民たる者誰か涙なからむやである。畏れ多くも宮中には雨が漏り、天の星を仰がれるまでに荒れさせ給ふと聞いては、たゞたゞ恐懼措くところを知らぬ。當時の武家のさま思ひやられて、心にくき限りである。

十二月九日

雪ふれば駒にくらおき野に山に
遊びし昔おもひいでつゝ

明治四十五年御製——「思往事」

「雪の降つた時に、馬に御跨り遊ばされて、野山に馬を進めさせ給ふ昔の事が思ひ出される」と御壯時を偲ばせ給ふ御歌である。壯年は人生の最も高潮に達した時代で、充分な活動も出來るし、相當社會から認められる時代である。それだけ又社會との交渉も多いために、いろ〳〵な問題も起りがちである。日々の新聞の三面記事を賑はすやうな大問題を惹き起すのも壯年期である。故に人間は少青年時代によく心を磨き知識を高めて、迷ふことなき心を錬へておき、軈て壯年時代となつて一生を誤らぬやうに、また失敗せぬやうな基礎を作つておかなければならない。

十二月十日

眞心をこめて錬ひしたちこそは
亂れぬくにのまもりなりけれ

明治四十四年御製——「太刀」

眞心をこめて鍛へあげた日本刀こそは、身のまもり國のまもりとなるものである」と、日本刀の本來の使命を詠ませ給うた御製である。傳家の寶刀は濫りに拔く可からざるものであると同時に、人は濫りに激すべからざるものである。些細のことに青筋を立てゝ立腹する人は極めて度量の狹い人である。かの忠臣大石良雄が、敵の眼をくらますために島原の青街で痴態の限りを盡してゐた。これを聞いた一鹿兒島武士が大石の本心を聞くために大石を訪ね、大石の腑甲斐なきを罵つて、彼の顏に唾をかけた。顏に唾をかけられた大石良雄は朗かに笑つてゐたといふ。その洪量のほどこそ感ずべきである。

十二月十一日

みち〳〵につとめいそしむ國民の
身をすくよかにならせてしがな

明治四十三年御製——「をりにふれて」

「みち〳〵に」はおのが志す道々にの意。「いそしむ」ははげみつとめること。「すくよかに」は、壯健にの意。「あらせてしがな」はあらせたいものであると希望する詞である。「各自〳〵の志す道をはげみつとめてゐる國民の身體を壯健であらせたいものである」と、畏くも國民の保健を思召された御歌である。「健全なる精神は健全なる身體に宿る」とは古來からの格言であるが、危險思想の持主の大部分は不健康體であるに徵しても明らかである。人は常に衞生を重んじ、不攝生を避けて健康の人となり、天壽を全うすることこそ、孝ともなり、忠ともなる所以である。

十二月十二日

あまてらす神の御光ありてここそ
わが日のもとはくもらざりけれ

明治四十三年御製——「寄神祝」

「あまてらす神」は天照皇太神を申す。天照らすといふより、み光といひ、曇らざりけれと仰せ給ふ。「天照大神の御稜威によつて、我が國の國威は輝いてゐるのである」との御意と拜し奉る。天照大神は日の神にまします。日は世界を輝かす。我が日本の國旗はその日を象る。日が世界を照らす如く、我が大日本帝國の國威は全世界に光り輝く。我が日本の前途こそ、實に旭日の天に昇るが如くである。この輝かしき日本に生を享けた我々國民こそは、その幸福を聲高らかに唱ひはやすことである。あゝ輝かしき日本の國よ。幸多き我等大日本の國民よ。

十二月十三日

しら玉を光なしともおもふかな
磨きたらざることを忘れて

明治四十三年御製——「玉」

「自己の磨きかたの足らぬことを忘れて、この白玉は光がないと思ふ」と、自ら常に省るべきよしを諭させ給ふ御歌である。自分の不明を悟らずして、他の惡を云ふは人間の弱點である。狂人は己の狂人たることに心づかない如く、常人も亦己の不明、無知に心づく人は少ない。而して誤れる批評をして平然としてゐる。神よりこれを見る時は、滑稽の沙汰であらう。人は須らく他を云ふ前に先づ己を省よ。己の心の鏡には、他の缺點や短所は直ちに映るであらう。これ己の缺點・短所を改めるべき良き鏡である。正しく己を省ることの出來ない人は不具者であり、狂人である。

十二月十四日

をちこちにわかれすみても國を思ふ
人の心ぞひとつなりける

明治四十三年御製――「人」

「をちこち」は彼方此方の意、ここは海外と國内とを指す。「國内に住む國民も、また海外に住む國民も、國家を思ふ心に變りはない」と、海の内外に住む國民が、一つ心に皇國を思ふを喜ばせ給へる御歌である。ユダヤ人は自己のために海外に移住し、移住すれば、その移住した國の心となる。彼等は國家を思ふといふことは更にない。日本國民は遙か南アメリカの地に移住しても、決して故國を忘れることはないのみか、内地に居る人よりも更に強い國恩を感ずる。ここが諸外國の國民と、我が大和民族が、その根本に於て大きな相異のあるところである。

十二月十五日

あかつきのねざめ〳〵に思ふかな
國に盡しゝ人のいさをを

明治四十三年御製――「曉述懷」

「ねざめ〳〵に」はねざめの度毎にの意。「國家に功勞ある臣を、曉のねざめの度毎に思ふことである」と功臣の上を思召し給ふ御歌である。國民はこのありがたい御製を拜誦して、恩といふことを思はなければならない。恩を知らぬ人は畜類にも劣る人である。俗間に犬でさへ三日飼はれれば主恩を忘れないと云はれてゐる。一度受けた恩は一生かゝつても返し得るものではない。物質で御禮をしたから、受けた恩を返したと考へるのは大きな誤りである。一旦受けた恩は終生忘れてはならない。然し施した恩はなるべく忘れるやうにしたがよい。恩を賣ることは恩を施さぬに劣ることである。

十二月十六日

思ふことしげからざりしそのかみに
よみつる書は忘れざりけり

明治四十三年御製——「書」

「思ふことしげからざりし」とはまだ社會に立たず、從つて社會との交渉が少ないために、いろ〳〵と煩雜なことを思ひ煩はされない。「そのかみに」は、昔をさしてその當時といふに相當する。「思ふことしげからざりしそのかみ、卽ち少年の折に讀んだ書物は、却つて記憶に殘つて忘れないものである」との御意である。學問は記憶力の最も旺盛な少年時代から、青年時代に於てなすべきである。青年時代には、記憶力も旺盛であり、社會との交渉も少ないために、種々な事柄が頭に入つて來ない。故に一度記憶したことはなか〳〵忘れない。學問は須らく青少年の間にしなければならない。

十二月十七日

みがかれて光そひゆく石をしも
昔の人は見しらざりけむ

明治四十三年御製——「石」

「石を磨きあげて、諸種の用に供することを、昔の人は知らなかつたのであらう」との御意と拜する。昔の人の知らなかつた遺利の世に生れたことは、聖代の幸福といふべきである。若し士農工商の階級儼然として存し、國主の行列に土下坐をした封建時代に、我々が生れたならば、どんなであつたらうか、或は亂暴武士のために、一刀兩斷に首を刎ねられてゐたかも知れない。或は誤つて犬を殺し、斬首の刑に處せられてゐたかも知れない。我々昭和の聖代に生を享けることは、何たる幸福なことであらう。聖代の皇恩に浴し文明の惠を受けて、安らかに生活し得らるゝことを思へば、たゞ〳〵有難さに感泣するばかりである。

十二月十八日

戰のかちにほこりてむらぎもの
心ゆるすなわがいくさびと

明治四十二年御製――「述懷」

「むらぎもの」は心の枕詞である。「心ゆるす」は油斷すること。「大戰後の軍人が、世界の强國といふ名のもとに、心驕つて、精神に油斷がないやうに」と誡め給ふ御歌である。油斷こそ仇敵にまさる大敵である。一時緊張した心持は、或る事が濟んだ後は、弛みがちなものである。然しそこが最も警戒を要するところである。或る事業に成功した時などに、その心に弛みが生じ、驕慢の心が頭をもたげ出して、忽ち失敗のどん底に轉落する例はいくらでもある。人は如何なる場合でも油斷があつてはならない。常に心をひきしめて緊張の態度を持してゐるこそ肝要である。

十二月十九日

田に畑に處ゆづりてしづがすむ
いほりちひさく見えわたるかな

明治四十二年御製――「田家」

「田に畑に處ゆづりて」は、少しでも田畑を廣くとるべく、吾が住む場所を狹くしての義である。井手曙覽の歌に「賤が家はひとりせばめて物うゝる畑のめぐりのほゝづきの色」といふのがある。「いほり」は家のこと。「田や畑を少しでも廣くとるために、吾が住む場所を狹くして住んでゐる農民の家は小さく見える」との御意と拜する。百姓が少しでも農產物を多くとるために、その身を休めるに足る小さい家に住居してゐる。都會の人は高價な地價を拂つて大邸宅を構へてゐる。どちらがゆかしい心持であらうか。必要もない大邸宅は何のためにするのであらう。

十二月二十日

つはものゝ戰ふさまを見るほどは
風の寒さもおぼえざりけり

明治四十一年御製——「大演習のをりに」

「軍人の戰ふさまを見ては、心も躍つて、風の寒さもおぼえさせ給はず」との御意と拜する。明治大帝にはこの年十一月より、奈良縣下に陸軍大演習を統裁し給ふ。その折の御製と恐察し奉る。酷暑の候や嚴寒の候に於ける軍人の演習を見たならば、吾々は寒いなどゝは決して云へない。況してや室にストーヴの煖をとることは恥かしい限りである。人間の慾望に限りがないと同時に、人間の贅澤にも際限がない。限りなき贅澤は人間を弱くし退化せしめることである。我々日本國民は質素を旨として、強く、壯健にを目指して質實剛健な生活をしなければならない。

十二月二十一日

さまざまのことにあひにし老人の
昔がたりぞ身にはしみける

明治四十一年御製——「老人」

「世の中のいろ〳〵なことを經驗した老人の昔物語は身にしみて面白いものである」と、、老臣の經歷に富める昔がたりに御感を催させ給うての御歌と拜する。老人の經驗談こそは、若い人々のよき參考である。若い人々は老人や先輩の貴い經驗談を聞いて、前車の覆へる戒めとしたり、その短所を改める資料とすれば、物事に失敗も蹉跌もなく進んで行くことが出來るであらう。老人の話は決して寢語であるなどと輕んずべきものではないのであるが、兎角青年は老人と云へば既に過去の人の如く考へ、老人の言葉に耳を藉すことをせぬ嫌ひがある。愼むべきことである。

十二月二十二日

世を守る神のみたまをあふぐかな
朝ぎよめせし殿にいでつゝ

明治四十一年御製——「朝」

「朝ぎよめせし殿」は、朝の掃除を終へたうるはしい御殿の意。「朝の掃除を終へたうるはしい御殿に出御ましまして、まづ世を守る神靈を仰ぎ給ふ」との御意である。神國日本の國民は、朝床を離れたならば、先づ身を清めて神前に額くことを忘れぬやうにしたいものである。何故に神前に額くかと云へば、神の加護あつて吾々は毎日かくの通り安らかな生活を營むことが出來るのであるから、毎朝これを感謝し、そして更に己の心を神の前にさらけ出して見る。卽ち己を反省して見るのである。人の道にはづれた行爲がないかを今日吟味して見て、更に將來も誠の道を踏み得るやうに加護を願ふのである。

十二月二十三日

老人があゆみゆくこそ哀れなれ
いまだ拂はぬ雪のなかみち

明治四十一年御製——「雪中行人」

「雪のなかみち」は雪の積つた道のこと。「未だ拂はない雪の積つた道を、老人が歩いて行くのが哀れである」と老人をあはれみ給ふ御製である。老人は家庭にあつてはよくこれを劬はつて慰めるやうにし、外に出て乘物の中などでは老人に席を讓つてこれを休め、坂道などで老人が苦しみつゝあれば、手を引いて助けてやることを忘れてはならぬ。かうした情景は、他から見ても極めてうるはしいものである。若い青年達もまた幾年か後にはその老人のやうな年齢となつて、若い人々から助けられる境涯になることを思へば、敬老の精神といふことは決しておろそかには出來ないものである。

十二月二十四日

人しげき都の市にきゝてだに
さびしきものを入相のかね

明治三十八年御製――「晩鐘」

「入相」は日暮をいふ。「人の多勢住む都會で、晩鐘を聞いてさへも寂しいものであるのに、ましてや人の少ない片田舍などで入相を告ぐる鐘の音を聞いたならば、どんなにか寂しく感ぜられることであらう」との御意と拜する。入相を告ぐる鐘の音こそは。そも人生に何を囁き、何を敎へるであらう？　怠慢を諫めるかに聞えることもあらう。或は無常を告ぐるかに聞えることもあらう。又、無限の寂寥を感ぜしめることもあらう。人は各〻その境遇や思想によつて、自ら鐘の音も異なつて聞えることであらうが、入相の鐘こそは何となく人生をせきたてるかに聞えることである。

十二月二十五日

萬代にうごかぬものはいにしへの
聖のみよのおきてなりけり

明治四十年御製――「をりにふれて」

「萬代のうごかぬものは」は、萬代不變で動かぬものはの意。「いにしへの聖の御代のおきて」とは、神代に於ける我が建國の精神と拜する。「萬代不變にして動かぬものは、我が國の建國精神である」との御意と拜する。我が日本の建國の精神こそは、幾千萬年の後と雖も不易にして、斷じて微動だもしないものである。然らば建國の精神とは何かと云へば、天照大神が皇孫瓊々杵尊に仰せられた詔である。これ實に我が建國の基礎であつて君臣の名分もこれによつて定まり、國體の尊嚴もこれに因つて成立つたのである。この三千年以前の建國の精神こそは、我が日本の誇りであるのである。

十月二十六日

國民のわくるちからのあらはれて
道てふみちのひらけゆくかな

明治四十年御製——「寄道祝」

「道てふみち」とはあらゆる道の義で、各般の方面をいふ。「國民が己の欲する各〻の方面に努力する力があらはれて、各般の方面も從つて開けて行くことである」と國民の力を嘉させ給ふ御製と拜する。げに日本の國は軍事・醫學・工業・商業・農業・美術・工藝・教育・哲學等凡ゆる方面に於て異常の進歩發達を遂げ、今や將に西洋の先進國を凌駕してゐる狀態である。實際貿易品の如きも、大正の終期に外國から輸入してゐた物が、反對に輸出するまでに至つてゐる。この異常なる進歩發達は、偏に明治大帝の御聖德によるこゝとありがたく拜さなければならない。

十二月二十七日

すゝみゆく世に生れたるうなゐにも
昔のことは教へおかなむ

明治四十年御製——「子」

「うなゐ」は幼童、をさなごのこと。「おかなむ」の「なむ」は希望をあらはす助辭である。「文明開化の世の中に生れた幼い子供達にも我が國古來の歷史だけは教へておかなければならぬ」との御意と拜する。苟くも日本に生れて我が建國の精神を知らぬやうでは、皇國日本の忠良なる臣民といふことは出來ない。どういふわけで日本の國が成立したか。國體の尊嚴といふことはどうして成立つたか。君臣の名分も何によつて定まつたかといふその根本だけは、小學校の兒童にも教へておかねばならぬことであり、國民の等しく知つておかねばならぬことである。

十二月二十八日

よりそはむひまはなくとも文机の
うへには塵をすゑずもあらなむ

明治四十年御製――「机」

「よりそふ暇はなくとも、机の上には塵をためないやうにせよ」と、日常の心がけを諭させ給ふ御製である。人間は日常の心がけが最も大切である。身の廻りは整然と片附けておき、室内の道具などもあるべき場所に規律正しくおき、起床から就床に至るまで凡て規則的にこれを行ひ、常に端然たる態度を持することである。何か事ある時とか、人前に出た時だけ、他所ゆきの心や言葉を用ひても、何の效もない。却つて表裏のある人といつて笑はれる位のものである。他人の前でも、自分一人の場合でも、さうした區別を立てることなく、常に整然と端麗を持つやうにしなければならない。

十二月二十九日

あらたまの年のをはりもちかづきぬ
暑し寒しといひくらすまに

明治四十年御製――「歳暮近」

「あらたまの」は年の枕詞で、別に意味はない。「暑い寒いといつてゐるうちに、はや歳の暮も近くなつた」と月日の流れの早きをやすらかに詠み給うた御製である。げに光陰は矢の如く早いものである。躊躇逡巡してゐる間に、月日は遠慮なく過ぎて行き、白髪翁となつて後悔しても、最早既に遅い。なすべきことは明日をまたずどし〳〵と實行し、經驗體得して、白頭翁になつて後悔せぬやう心がけなければならない。人生五十年といふ月日は長くも見えるが、過ぎ去つた過去を振り返つて見ると、まさに一瞬のやうな心持がするものである。

十二月三十日

ふりつもる雪をしのぎて咲く梅の
花はいかなるちからあるらむ

明治四十四年御製——「雪中早梅」

「しのぎて」は堪へ忍ぶといふよりはその意味強く、押し分けて上に出ること。「降り積つてゐる雪をおし分けて咲く梅の花はどんな強い潛勢力があることであらう」との御意である。春の陽光を受けてすくすくとふくらみ、三日見ぬ間に散り果てる櫻の花に比較するに、嚴寒の雪と戰ひ、氷にうち勝つて、而かも馥郁として清楚たる花を開く梅は、遙かに貴くもあり、麗はしくもある。梅の嚴寒は人間の艱難に比すべく、氷雪に打勝つは忍耐に比すべく、その馥郁たる花は、成功にも比すべきものである。

十二月三十一日

しづのをが一人ひきゆくをぐるまの
重荷の上につもる雪かな

明治四十年御製——「車上雪」

「しづのを」とは身分の賤しい男の意で、ここは車力のこと。「車力が挽いて行く重い荷車の上に、雪が積つてゐる」と車上に積る雪の實景を詠み給ふ中に、彼等の辛苦をあはれませ給ふ大御心をこめさせ給ふ御歌である。寒中雪の中に重い荷車を挽いて行く車力、何と尊い勞働であらう。ストーヴに煖をとつてする勞働に比すれば、その尊きこと、遙かに數等であらう。而もその得るところの報酬は、ストーヴに煖をとりつゝある勞働の何分の一にも相當しないものである。然し彼等は何等の不平も言はず、樂しく立ち働いてゐる。何と美しい心構であらう。

本書御製を日々必ず拜讀せられ、何卒明治大帝の大御心に副ひ奉り、眞に國を愛し、人を愛する、立派な人物となられるやう切に御願ひ致します。

昭和十年六月十日印刷
昭和十年六月十五日發行

明治天皇御製集

◆定價金貳圓◆

編修者　愛之事業社謹纂

發行者　東京市麹町區飯田町一丁目
加藤三津夫

印刷者　東京市牛込區榎町七
安達信雄

發行所　東京市麹町區飯田町一丁目
愛之事業社
振替東京六七二〇四番
電話九段(33)三四四四番

大日本印刷株式會社榎町工場印刷

H-5786